海外協力の現場から

ザンビア編

青年海外協力隊員の記録

昭和55年3月

ARY

国際協力事業団
青年海外協力隊事務局

JICA LIBRARY
1018458[8]

国際協力事業団
受入月日 55.7.18 84.5.23
登録No. 07186
533
36
JV

序にかえて

昭和55年3月

青年海外協力隊
事務局長　黒河内　康

ここに，青年海外協力隊員の活動に関する報告書集をとりまとめ，協力隊事業に直接かかわりのある各位はもちろんのこと，日ごろから協力隊事業に深い関心を示され，ご支援を賜わっている多くの方がたの利用に供することができることは，私のまことに欣快とするところである。

協力隊員の活動は，開発途上国において国づくりにいそしむ人びとの"お手伝い"が目的である。時には，お手伝いでなく，自ら手を下してしまいたい誘惑にかられることがあって不思議はないし，事情が許せば，それを排除するまでもない。しかし，多くの場合，「代位」ではなく「介助」であり，もどかしさはもちろんのことだが，いろいろ屈折した感情が累積することもあろう。

その中で，より一層，途上国の人びとの中に融けこもうとし，協力手法を改善充実しようと悩み，工夫している過程から生まれた報告書は，貴いものである。報告書に書かれていることはもちろん，書かれなかったことについても。

この報告書集に収録したものは，そうした数多い隊員の報告書の，ほんの一部分にしかすぎない。協力活動の側面も限られているところがある。続編にその補充を期待したいと思うが，読者各位におかれては，この報告書集を手がかりに，協力隊員の活動の間口と奥行きが大きく，かつ多様なることを推察していただきたいと念じている。

協力隊員の技術・技能は，水準が高いだけでも十分でないし，日本式の技術移転で成功するとも限らない。技術・技能をもった協力ボランティアにしてはじめて，途上国の技術・技能の中堅層の育成につながる手法や径路が生まれると信じている。teacher of teachersとして，あるいはtrainer of trainersとして活躍できるよりは，1対1のカウンターパート養成に終わることもあることに，南北問題のむずかしさがある，と感じとっていただければ幸甚である。

この報告書集では，関係職種の協力隊技術専門委員の方がたのアドバイスをいただいて，隊員（OB）の追記と合わせて掲載した。現在活躍中の隊員はもちろん，これから協力隊に参加しようとされる青年諸君にとって裨益するところ多いと確信する。ご協力いただいた各位に感謝の意を表したい。

ザンビア編

目　　次

序にかえて……黒河内　康…(1)

Ⅰ ボランティア・エンジニアとしての充実した3年間 ……今野　明…(5)
日本に帰って考えること……今野　明…(32)
今野隊員の報告書を読んで……大井田　清…(33)

Ⅱ カルチャーショックの連続だった2年余の生活……吉田　繁…(37)
吉田隊員の報告書を読んで……上川　修二…(44)

Ⅲ 地方の獣医学研究所充実に活動の力点……関　高樹…(45)
日本に帰って考えること……関　高樹…(51)
関隊員の報告書を読んで……松山　茂…(53)

Ⅳ NAMWALAの畜産事情と獣医活動……千葉　好夫…(55)
総合報告書へのコメント……千葉　好夫…(71)
千葉隊員の報告書を読んで……松山　茂…(73)

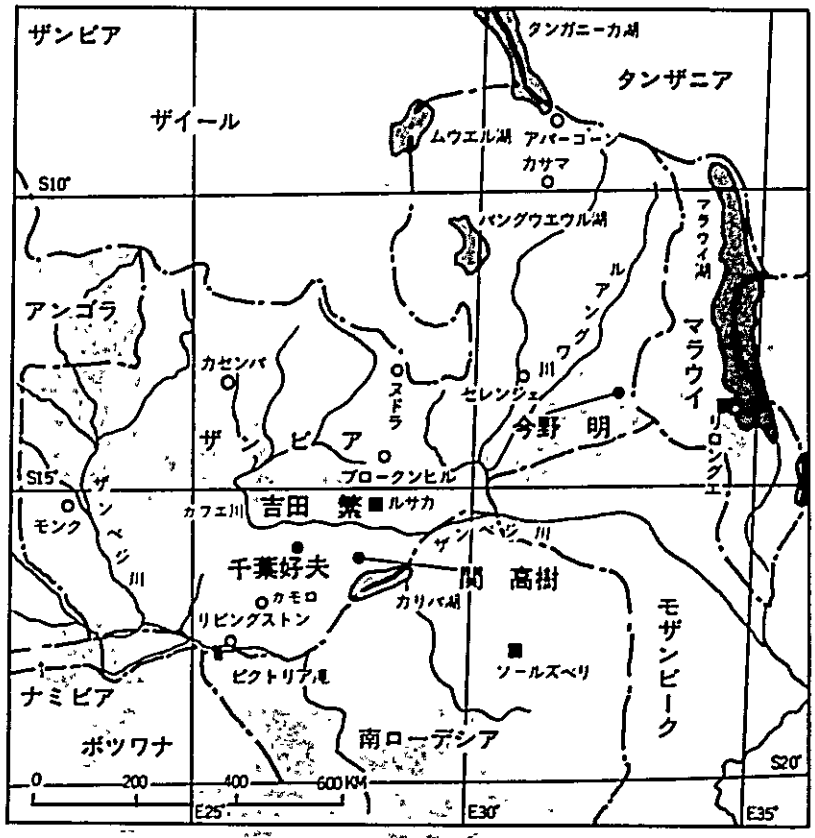
あとがき……高橋　成雄…(75)

〔付〕ザンビアと協力隊……(2)
ザンビアの略図と概要……(3)

ザンビアと協力隊（昭和55年3月1日現在）

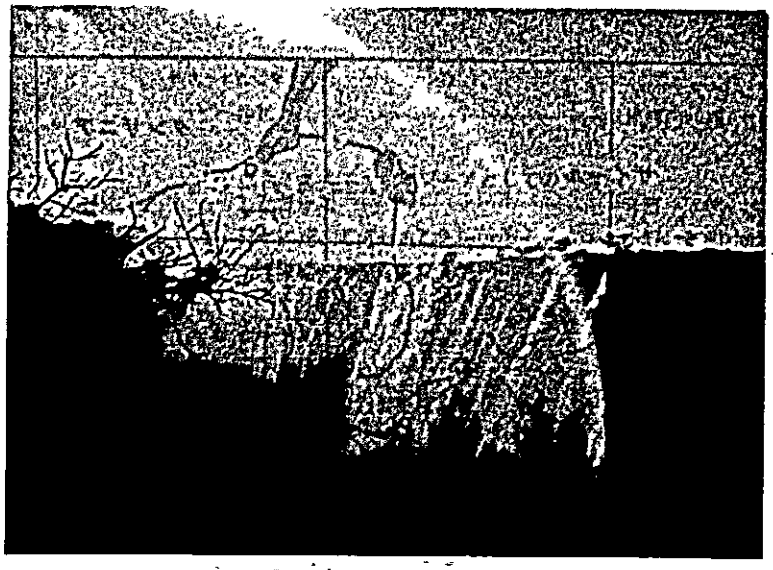
最初の隊員派遣：昭和45年3月								
職種部門	農林水産	製造	保守操作	土木建築	保健福祉	事務文化	教育訓練	合計
派遣中	10 (4)		28	1		1 (1)		40 (5)
実績（累計）	25 (4)		89	2		2 (1)	18	136 (5)

(注) カッコ内は女性隊員。



ザンビア共和国概要

面　積：752,614平方キロメートル（日本の2倍）
人　口：535万人（77年央国連推計，人口密度7.1人／㎢）
宗　教：キリスト教，イスラム教，原始宗教
公用語：英語
1人当たりの国民所得：391ドル（75年国連推計，日本4,937ドル76年）
通　貨：クワチャ，1ドル＝0.807クワチャ（78年央），1クワチャ＝約310円
首　都：ルサカ（40万人）
元　首：ケネス・デービッド・カウンダ大統領
主な輸出品：銅



ボランティア・エンジニア
としての充実した3年間

総合報告書
派遣国　ザンビア　51年1次前期組
職　種　無線通信
氏　名　今野　明
配属先　Department of Civil Aviation, CHIPATA

今野隊員の略歴

氏　名	今野　明
生年月日	昭和23年6月7日
出身県	神奈川県
職　種	無線通信
派遣期間	51年8月～54年8月

Ⅰ 現地訓練の体験

任期延長の1年を入れると3年間もザンビアにいたことになるが，誰もが思うように，年月とは過ぎてしまえば早いもので，協力隊の訓練を終え羽田から期待と不安を持って飛びたったのが，つい先日のことであったように思える。これは総合報告書なので，以下，現地訓練から今までの経過，そして仕事の内容などを書きたいと思う。

日本を離れるときは，発展途上国へ行くということで，期待よりも不安のほうが大きかった。もう4年以上も前のことになるが，ヨーロッパへ行ったことがある。そのときは先進国へ行くことだし，また観光旅行が目的だったので，期待が大きかったのは言うまでもないが，今度はアフリカ。協力隊で任国の事情をＯＢから聞いていたものの，やはりＴＶや映画，本から受けるアフリカという印象が強く，そして仕事で行くとなると，そこの人達や土地でうまくやれるかどうか不安でならなかった。しかしそれもザンビアに着くと少しは不安が除かれた。思っていたよりもというか，日本とほとんど変わらないエアーポートで明るく，天候がすばらしく快適。人間の数こそ少ないが，皆背広にネクタイである。清潔でしっかりした秩序があるなといった印象であった。それから2，3日，水が違うためだろうか自分では胃に自信があったのだが，腹痛と高熱で苦しめられた。しかし調整員それに先輩隊員，同期隊員の日本人がいるので心配はなく，3日後くらいには正常となり大使館や航空局に挨拶をした後現地訓練のため，観光地で有名なリビングストンへ向かった。

外国へ行ったことがあるというものの，今後は一人でやらなくてはならないかと思うと，また不安になった。先輩隊員に駅まで送ってもらうが，「それじゃがんばれよ」と言われ一人になる。英語にはそれ程不安はなかったのだが，この国のオフィシャル用の言葉は英語なのにもかかわらず，周囲の人達は現地語ばかりで話している。切符が買えるかどうか心配なので，声をかけてみる。「あっ英語を話せる」と喜んだのはいいが，発音が，その当時はすごくおかしいものに聞えた。相手は俺は英語しゃべれるのだ，と言った調子でペラペラ。切符のことなど忘れて「お前は中国から来たのか。日本？知らないけどヨーロッパのどこらへんにあるのか。中国の日本市なのか。そうか，わかった。ところでどこへ行くのか一人で」としゃべりまくっている。周りの者もこちらが英語を話すとわかると集まって来て話に加わる。そんなことをしていると切符売場の前に長い列ができていて急いで列の後に並ぶ

が，駅の外へ出てしまった。汽車が来てもまだ後のほうだ。しかし現地人のほうは別に心配そうな顔もせず整然と並んでいる。約２時間も並んでやっと切符が買えたときにはフラフラ。現地人はがまん強いんだなあ。

そういえば，マーケットやバス乗り場でも長い列ができているのが目につく。聞くところによれば半日ぐらい並んでいるそうで何もせずに半日も立っているなんてと変なところで感心させられた。プラットホームに入る。と今までいた汽車が乗客を乗せずにどこかへ行ってしまう。故障だそうで，新しい汽車が入ってくる。おやっ，どこかで見たようなと思ったら，やはりボディの横に日立製作所とあった。中国人の作った鉄道に日本の汽車が走っているわけだ。そういえば町で見かける車の半分ぐらいは日本車だったことを思い出す。日本のことなどほとんど知らないにもかかわらず，日本の製品がたくさん入ってきている。こちらではオートバイのことを全部ホンダと呼んでいる。いや，ホンダ＝オートバイが，一つの単語になっているのだ。日本という国は地球の裏にあたるザンビアにまで進出しているのだから，すごい国だ。そんなことを考えながら２等車のほうに乗り込む。現地訓練に行くのだから３等車へ乗らなければいけないのかもしれないが，病気が治ったばかりの後だし，いっぱいだったこともあり，甘えて２等車にさせてもらう。

聞くところによれば特等車もあるそうだが飛行機の料金よりも高いそうで驚く。とにかくも駅に着いてから３時間ぐらいして無事出発。そしてリビングストンまでの距離４００kmを約１１時間かかって走った。着いたのは夜１０時をとっくに過ぎたころだった。バスもタクシーもなし。仕方なく１時間近く歩いて先輩隊員の泊っているホテルへ。やっと一息ホッとする。翌日からは先輩の紹介で現地の家へ泊る。そこはポストオフィスの技術屋さんの家。ザンビアでは中流以上の家庭らしく，電気あり，水道あり，おまけにステレオや水洗トイレまである。先輩に「お前は幸せだ。こんないい家で現地訓練ができるのだからな」と言われて感謝。が，である。夜になったらコンクリートの床の上に毛布をしかれ，そこに寝かされる。そこまでは別に何ともなかったが，電気を消すとゴキブリ，クモ，ノミなどが手，足（私は手や足を出して眠るクセがある！）といわず顔の上も走り回る。寝つきがよいほうではないので，このときには困った。夜明けまで眠れず寝不足だ。だがこれは１日だけ，リビングストンは観光地なので昼間あちこち歩き回り夜には疲れていた。それにそこの主人が夜はバーへ連れて行ってくれる。１ダース以上も飲まされて腹がだぶだぶ。マイッタ，マイッタ。そんなわけで次の

日からは問題なく毎日が過ぎていったが，しかし奥さんには種々とお世話になった。食事は特に気をつかってもらい，肉と野菜とどっちが好きだと言われたので，肉はあまり好きではないと言ったらシマ（日本の主食，米に相当する粉状のものである）といっしょにいつも西洋アブラナを出してくれた。夜は手持ちぶさたでいると，現地語を教えてくれたり，アルバムを見せてくれたりして話し相手になってくれた。とにかく3年間の中で一番記憶に残り，また一番良い思い出となったことは確かだ。そしてこの現地訓練がザンビアと，そこの人達の生活をうまく教えてくれたようだ。

Ⅱ 任務内容

現地訓練が終り，ザンビアへ着いてから約1ケ月ほどで任地へ行くことになった。期待に胸をときめかして（かどうか確かでなかったが）飛行機で任地のChipataへとなったが，飛行機がおりたところは滑走路は滑走路だが，それが舗装されていなかったのだ。空港というからには日本の空港とはいかないまでも，少しは小さいかなと思っていたのに，何とホコリを上げてこれから2年間勤めるというエアーポートにおりたのだから，ビックリさせられた。翌日からは先輩に種々教わる。が別段むずかしいことはないようでうまくやっていけそうな感じがした。任務内容はエアーポートと約20Kmほど離れた丘の上の機器の保守である。機器の概要は毎月ヘッドクオーターの出すレポート用紙に示しておいた。合計すると40台近くの機器，送・受信器，航行援助装置がある。その他ジェネレーター，アンテナなどの付属設備が加わる。毎日，朝と昼の2回点検をして回る。故障はそのたびに見つけ次第修理にかかるので，それほど大きな障害にも合わない。真空管不良，接点不良が多く，その他のＬＣＲの交換はほとんどなかった。ただしレポート用紙を見ればわかるように，ほとんどが真空管式の古い機械で，時には回路定数が変わってしまい，たびたび真空管を取り替えたり調整をしなければならなかったものもある。その場合は回路定数を変えてやったり，回路を変えてしまったものもある。特に20Kmほど離れたカンジャーラという山の上にあるＶＯＲは問題が多かった。

このＶＯＲという航行援助装置には泣かされた。接点不良に加えて回路定数が変わってしまい，どうしても発振しなかったり増幅度が足りなかったりで困らされたものだ。私の場合，ラジオ，アマチュア無線などの機械いじりが好きだったので，また真空管回路にも慣れていたので，大分助かったが，

これが，そういった経験のない，また進んだ日本の技術しか知らない者にとってはたいへんだろうと想像される。それと，もう一つそのＶＯＲにはたいへんなことがある。毎年１回のフライトチェックという，飛行機による較正がある。これは私が来てからやるようになったのだが，１５年くらいもの間較正検査を受けていなかったため，すべて初めからやらねばならなかった。サービスマニュアルは不備だし，スタンバイのほうは全然働かないし，それに１回目は任地へ来て１ケ月もたっていないときだったため，たいへん苦労をされられた。何とかヘッドクオーターから資料を集めて数百ページにのぼるサービスマニュアルとにらめっことなった。送受信機なら慣れたものだが，無線航行援助装置など初めてで，頭の中はその回路図でいっぱいになってしまった。

もちろん英語で書かれているし，回路図の書き方は日本のそれと違うので四苦八苦。それでも山とエアーポート間を往復数十回，約１週間で完璧になり，フライトチェックを受けたときは，うれしいというよりホッとしたものだ。このフライトチェックも私がいた３年間に３回受け，どうにかＩＣＡＯの規定に適い，今日でも飛行機の安全航行に役にたっているわけだが，誰の助けもかりずに保守，運用できたのは，私がここに来てうれしかったことの一つである。

日本だとＮＤＢでも数人の技術者，ＶＯＲだと数十人の技術者が勤務しているのを考えると，自分でもよくやったものだと考えられる。各回路には数ＫＶの高電圧がかかっているため，一人での保守は危険が伴なうので十分な注意を払い，調整，修理をしたが，後任隊員も十分に事故に注意さえ払えば日本の技術をもってすれば，任期中うまくやっていけるものと思う。

そんなところが私の仕事の内容であったが，少しグチになるかもしれないが，保守という仕事は，部外者から見ると，すごく楽な仕事に見られる傾向があるようだ。確かに故障がなければ１日２回の機器の点検と毎月のレポートの作成ぐらいしかないが，何も好きで１日中本を読んだり勉強をしているわけではないのである。それがまるで遊んでいると思われるのは心外。仕事（故障）があったときなどは全力投球。食事や時間など忘れ，頭をフル回転させている姿も見てもらいたいと思う。ここのような地方のエアーポートでは修理に従事できる者は助けになるものは自分以外には一人もいない。自分だけがたよりなのだ。それも６時間以内にその故障が直せないとヘッドクオーターへ連絡しなければならない。というのも飛行機の航行に影響を与え

るものが多く，特に安全性，経済性に関係するからだ。そんなわけだから，真夜中や早朝に起こされることもたびたびあった。また私のエアーポートではなかったが，機器が故障のため飛行機がそこまで行けなかったというようなこともあり，我々エンジニアの働きはたいへん重要であるということをわかってもらいたいと思う。我々がいなければエアーポートが運用できないということも。

協力隊月刊誌とか，他のボランティ関係の雑誌に農林，土木隊員などのことが，さもボランティアらしい活動をしているといったふうに書かれていると，「うらやましいな，俺達も何か目立ったことをやってみたい」とも思うが，反面我々のような目立たず，かっこうもよくないが，直接に途上国に役にたっている隊員もいるということを知ってもらいたいとも思う。何か新しいものを創造するということは確かにむずかしいことだと思うが，たかが２０歳，３０歳の若者が一人でがんばってみたところで，本当に途上国に貢献できることなど，そんなに簡単にできることではないはず。これからボランティアとして途上国へ行くエンジニア諸氏，上辺だけの華やかさにとらわれず，我々は本当に途上国から必要とされて任地へ行くのだということを胆に命じてがんばってほしいと思う。

Ⅲ　受入先の評価は高い

そんな任務だが，我々の受入先の航空局の姿勢はというと，以上に書いたように，エンジニアというのは本当に必要とされるため，他のデパートメントと比べると比較的いいようだ。また先輩諸氏ががんばってくれたおかげもあると思うが，日本人ボランティアのエンジニアはすぐにエンジニアとして各ローカルエアーポートに配属され，一切の保守をまかされる。完全にヘッドクオーターから信用されているのだ。そして住居のほうも１軒家。それも３ベッドルーム，トイレ，バス付，ダイニング，キッチンも，リビングルームもある家を与えてくれる。技術者不足なので局長と同じ家である。勤務時間は一応８時から１７時までとなっているが，夜でも，土・日・祭日でも故障があれば出なくてはならない。その他仕事をするにあたって測定機，工具などの不備，部品の入手の遅れといった不満はあるのだが，開発途上国のこと，それらの費用の余裕が少ないことは明らかのため，何とかやるしかないと思う。また，この３年間，何とかそれでやってきたのも確かである。以上のように私自身としては私に対しての待遇にはそれほど不満はないので

あるが，仕事の内容すなわちエンジニアという保守の仕事にボランティアらしくないと不満をもらす隊員もいることは事実である。要するに我々が今のままでいる限り，いつまでたっても同じ状態が続くのではないかということである。我々日本のボランティアには給料を払う必要はないし，技術は優秀だし，いつまでもこの方式でやっていかれるのではないかというのである。確かにそういう心配もあるかもしれない。しかしそれは私に言わせれば，途上国に対して失礼にあたるのではないかと思われてしょうがない。彼らだって我々若者が考えていることくらい知っているはず。それにこの国は教育熱心で，いつまでも我々にそんなに高度でもない技術を任せておくわけがないと思う。それでは我々が教育のほうに力を入れ学校で教えたら，という意見もあるが，もし我々に余裕があって教育のほうと各エアーポートのエンジニアに人員を送れればいいのだが，そうでなくエンジニアをすべてやめ，教育のほうへ，というのには反対である。確かに教育という仕事はすばらしく，また成功すればボランティアとしてもすばらしいことだと思う。が，やはり教育というのは日本語で教えてもむずかしいというのに，あまり英語が得意でない日本人が教えるというのには疑問がある。結局，航空局のエンジニアは，上辺ははでではないが，本当の意味でこの国のためになっているという自覚を持ち，任期を勤める。教育は英語ができ技術の理論と教育法を心得ているものに任せたらどうかというのが，私の意見である。また，もし現地のエンジニアたちが生まれ，実技に不安だからということであれば学校で，そして環境が許せば各エアーポートで実技を教えるというのには賛成であるが，とにかく，３年間，私に関する限りエンジニアとしてザンビアの航空局で働けたことは幸せであった。

Ⅳ ザンビア人の日本観

現地の人達や彼らの生活などについて書いていこう。ボランティアとしての私達にとって一番大切なことかもしれない。我々ボランティアは若い。また，それ以上に彼らの目には我々は若く見られる。私など，もう３１歳なのだが，２３，４歳にしか見られない。そのため現地人は皆気軽に話しかけてくる。また，同じように白人（ヨーロッパ系）とはよほど違う人種とも思っているようだ。要するに植民地時代，彼らを支配していた人種とはちょっと違う。何かと興味があるのだろう。実際，彼らは何にでも興味があり，「日本？　ヨーロッパのどの辺なんだ。えっ，違うのか，中国の日本市なんだ

ろう。俺，知っているぞ，学校で習ったよ」とか，何でも知りたがる。そこで，あれやこれやと説明を始めるのだが，日本のことを英語で話すだけでも説明不十分となるのに，情報源のほとんどない彼らに納得させるように話すのはたいへんだ。しかし最近では，ずいぶん日本人というのを知ってもらったのは確かである。ここチパタには5年前から日本人が入っているが，私が来たときは，まだ「Chinese！」なんて言っていたのが，最近では「Japanese，Karate man」に変わっている。当然，そういうことを言うのは子供達なのだが，大人達は私達を通してだいぶ日本を知っているようだ。トヨタ，ニッサン，ホンダ，マツダ，セイコー，サンヨー，トウシバ，ナショナルなど，私が来たときは日本製なんて全然知らなかったのが，今では，「うん，日本製は最高だ」ということになっている。特にザンビア大学による日本の紹介も，実際には日本人が中心となって「Pacific Friends」の展示，説明や，映画（大使館から借りたもの）の上映などを行なったり，ザンビア人を中心に空手教室を開いてからは，ずいぶん変わったように思う。商社とか企業などとは違い，片よった宣伝のようなことはしないために，印象が良いことは確かである。

今では私達のことを「Chinese！」なんて呼ぶものはいない。「Oh！Karate Japanese」である。町で話しかけてくる者は「トヨタ，ニッサン，ホンダ，セイコーは最高だ。お前，持っていたら売ってくれ」とか，「空手というのは何なのだ。できたら俺にも教えてくれ」である。というのも今では週2回空手教室を開き20人くらいに教えているからだ。それも全くの日本式で「礼に始まり礼に終る」式に行なっているのが，彼らにとっては他のスポーツとは違って，何かピリッとしたものがあり，やりがいがあると思うのだろう。現在出席するものは十数人だが，彼らを見ていると実に気持ちがいい。道場としている部屋に入るときには「押忍」，私語はいっさいしない。我々に話しかけるときは必ず頭を下げて礼をする。我々がしゃべる日本語も名詞だけではあるが，いっしょうけんめい覚えようとする。今では「イチ」から「ジュー」までは誰もが知っているし，空手の型の名なども理解して私達を喜ばせているくらいである。皆，若いこともあるが，ヨーロッパ系の人種とは違っている。また，それが魅力のあることと考えているように思う。物質中心主義には彼らは反発を感じているようだが，日本では古いなどと思われる精神的なものが，かえって受け入れられるようだ。日本文化，東洋文化というか，彼らを見ていると捨てたものではないというような

気がするし，私達がここへ来たのも彼らの行動を見ていると無駄でなかったような気もする。ボランティアでなかったら彼らとも逢えなかったし，日本人というのも知ってもらえなかったのではと思うし，ボランティアでよかったとも思っている。こんなアフリカの田舎でさえも日本というものを私達ボランティアを通じて知ってもらえたということは，意義があったのではないかと思う。自負さえもボランティアとして感じている。

以上はザンビア人が日本というものを少しは理解してくれたのではないかといったものであるが，今度は私達の目から見たザンビア，ザンビア人について書いてみたいと思う。

V 私の見たザンビア人

ザンビア人というのは我々とどこが違うのだろう。どういう人間なのだろうか。時間を気にせず生活し，急速な時代変化のため新旧入り交った生活態度が目立つ。こんなふうに書くと，そうむずかしいことではなさそうだが，私などは初めのうちものすごいカルチャーショックを感じたものだ。エアーポートの職員や政府の機関の人間は皆きれいな英語を話すとはお世辞にも言えないが，植民地英語というやつを流暢に話すかと思えば，女性や年寄は一言も英語を話さず，村へ行けば男もほとんど話せなくなる。生活も英語を話せる者達と話せない者達の差はひどいものがある。

政府のオフィサー達の給料は，３００～４００KW（¥７５,０００～１００,０００）だが，ガードマンや雑用係は４０KW（¥１０,０００）にすぎない。さらに村へ行くと半年間も作物を作って売り１００KWの金しか入らないのだ。オフィサー連中は裕福とは言えないが，我々に近い生活を送っている。政府からは大きな家をもらい，電気・水道はただ。車も政府のナンバーの付いている車を私用につかう。たいした能力もないのに，と言ったら怒られるかもしれないが，ただ英語をしゃべるといったことで，上の地位にすわっている。そして，その権力を公私ともに利用している。何てことはない，植民地時代の白人と同じことをやっているだけではないか。白人を追い出して，そのイスを現地人で埋めただけではないのか。それも悪いことに英語をしゃべるのはいいが，それだけで，技術のほうが全然伴わないのであるから，国の政治，経済は悪くなる一方のように感じられる。私が来た3年前と今とを，物資と物価で比べてみれば，すぐわかる。輸入品は山ほどあった。上は車から，安いほうではかんづめ類まで，町へ行けばほとんど手に入った。今

は車の輸入はなく，ザンビアで部品を輸入して組立てているFiatだけ。それも月産5台とか6台とのうわさだ。かんづめはザンビア製のお世辞にもうまいとは言えないもの2，3種類。クッキングオイル，洗剤，石鹸，砂糖，米などは売られると数百人の長い列だ。物価のほうもその品不足に加えてひどいもの。ガソリン3年前30N，今70N。オイル10KW，今27KW。クッキングオイル4KW，今10KW。洗剤，石鹸，米なども同様に2倍から3倍。贅沢品になるともっともっと高くなった。車2,500KWから4,000KW。ウイスキー13KWから27KW～30KW，輸入のかんづめはたまに出ると毎回値上げで昔の2倍以上は確実となった。食料品も同じ。肉は1Kg2KWだったのが4KW。野菜もほぼ倍になった。日本で，日本のインフレはひどい，なんて言っているが，とても発展途上国にはおよばないのである。

よその国，ましてや3年間も生活した国の政策の悪口など書きたくはないのだが，こう，どんどん悪くなるのではグチも言いたくなる。政府の上の者が英語をしゃべるエリートで占められていたのではだめ。この国の現地語は大きく別けて四つ，細かく別けて70ということから，英語も，言語を統一するのに確かに重要かもしれないが，コミュニケーションの手段にすぎないのだから，政策，技術面にすぐれた人間をどんどん上の地位に上げ，給料の差をなくし，国民が平等な生活を送れるようになれないものだろうか。

また，上についた者達の態度も，俺は何でも知っていると本気で思っているらしく困ったものだ。何で，もっと謙虚になれないのだろうか。地位が上ということは，下の者達よりも立派な人間，優秀な人間と固く信じているのだ。この影響は我々ボランティア，そして外国からのコントラクターにもだいぶかかっている。すなわち「お前達は俺よりも下の地位なのだから俺の言うことをやっていればいい。文句など言うな」式なのだ。また，同じ地位の者達も「俺とお前は同格だ。だからお前の知っていることぐらい俺も知っているぞ」といった具合で，全然，意見など聞かない。本当にプライドが高い。

結局，政府のオフィサー連中がもっと謙虚になり勉強しろということか。ザンビア人観とは少し離れたようだが，オフィサー達を見ていると，やはりまだ，独立してから十数年しかたっていないので，ザンビア人に共通した所がわかる。上に書いたようにプライドが高いことなどが，そうだ。また，人種差別というか民族差別も目につく。地方から出て来た者でここの現地語を

話せない者はよそ者扱い。ましてや肌の色の違う我々など，全くよそ者扱いで，表面ではニコニコ笑って「お前はベストフレンドだ」なんて言っているクセに現地語で私の顔をチラッ，チラッと見て悪口を言うのだ。どうして悪口とわかるかというと，後で誰かが，「あいつは悪いやつだ。お前の悪口を言っていたぞ」なんて，すぐに私の味方のようなことを言うからなのだ。白人の人種差別もひどいのだろうが，アフリカ人同士の人種差別もひどいし，他の人種に対するアフリカ人の差別もすごいようだ。

悪口ばかり書いたが，いいところもたくさんある。明るくフレンドリー，金銭面以外で困ったことがあれば，いっしょうけんめいに助けてくれる。年寄，親，兄弟思い。上司，先輩，年寄には絶対に服従などが，そうである（悪くとれば何を考えているのかわからない，金銭的にはきたない，他人は絶対に他人，部下，年下に対して態度が大きい，ということになる）。毎朝オフィスに行くと「オー　マイフレンド　グッドモーニング　ハウ　アーユー」で握手。「今日はいい天気だなあ。もう少し暖くて風がなければ，もっといいけどなあ……」で，きわめて皆フレンドリー。朝から気持ちがいい。日本だったら「おはようございます！」「あっ，おはよう」で終わりだろうが。親，兄弟そして親戚思いは必ず家族の中に親戚の者が数人いつもいることからわかるし，休みになると必ず里帰りとなる。金銭的に余裕があるわけでもないのに，どんなことをしても帰るのだから。それも1,000㎞も2,000㎞も離れているのに。上司の私の場合，エンジニアなので，4人の部下というか，助手がいるのだが，私の言うことは絶対。何を言っても反対するわけでもなく，よく働く。空手教室でも，黒帯をしめている私達を大先輩と見ているのだろう。すごく腰が低く，教えることは一生懸命に覚えようとするし，教えたことはそのまま覚えている。文句を言わずに。

日本語といったら大げさかもしれないが，空手の「かまえ」とか「型」はすべて日本語で覚えた。年寄というのは少ないのだろうか，地位の高い者でも年寄に対しては腰が低く，人生の先輩ということで尊敬しているのだろう。見ていてとても気持ちがいい。ただ前にも書いたように，逆の立場の人間がもっと謙虚になれれば，もっといいと思うのだが。親切さも特筆できる。パンクをしたとき，ぬかるみにはまったとき，道を聞いたとき，わからないことをたずねたときなどは，親切すぎるくらいに助けてくれ，答えてくれる。こんなときは自分勝手なものでザンビア人というのは根は本当にいい人間なんだなあ，先進国にはないすばらしいものを持っているんだなあ，と尊敬とい

うか，うらやましく思ったりもしたものだ。人類というのは本当に矛盾している動物だとも思う。

以上あげたザンビア人の短所，長所は私達，物質的先進国の人間の目から見たものだが，この見かたではたしてよいものなのだろうか。今のザンビア，はたして昔よりよくなったのだろうか。地位の差が激しくなっただけで，国民の平均的生活は向上したのだろうか。昔のように村長を中心に，それものんびりとした農耕生活で毎日毎日を楽しく生きていたほうが，彼らにとって幸せだったのかもしれない。先進国の人間が毎日あくせく機械の部品になって働いている姿と，のんびりと畑で自分の食べていけるだけの作物を作っている人間の姿と，どっちが幸せなんだろうか。聞くところによると，人類は赤道の近くで発生したという。その日，その日を懸命に，そして楽しく生きていくのが本当の人間，人類なのではないのだろうか。将来のこと，老後のことばかり考えて，今の自分を大切にしない先進国の人間は幸せなのかなあ。特に休日に村などに遊びに行くと，のんびりとだが幸せそうに畑仕事をしながら，何か楽しそうにおしゃべりをしている。そういう村人を見ると，たいへんなことがあることもあるのだろうが，本当に幸せそうに見える。こののんびりと楽しそうな生活に，我々先進国の人間が，先進国のあわただしい生活を押し付けてよいものなのだろうか。出来ることなら押し付けたくはないと思うのだが。

彼らに聞けば毛布がほしい，ベッドがほしい，洋服がほしい，などと言うが，それでいいものか。我々が失ってしまったものを，彼らは持っているのだから。しかし一方，今の世の中強者が残り，弱者は消えるという時代。昔のような生活をしていたのでは，先進国＝物質的強者に対し，途上国が弱い立場になってしまうので，やはり途上国は先進国に近づいたほうがいいのかもしれない，というのが私の結論になったようだ。人間，人類は，どうしても科学的に進歩しなければいけない動物なのだろうか。

Ⅵ 勉強になった3年間

最後に，この3年間，長いようで短かったザンビアでの生活，私にとって，いろいろと勉強になった。前にも書いたが，約1年ヨーロッパに語学の勉強のためにいたことがあった。が，しかし，ここザンビアでの3年間は，そこの生活とは全く違うものだった。片や，すべてが自分のためだけという生活。片や，国を中心にした生活。そして現地人と直接の接触は全然違った

ものだった。国際人などと最近，日本の新聞や雑誌などで騒がれているようだが，机の上でいくら勉強しても，異国の異文化に直接接し，それもある期間，そこに住むのが一番だと思えてきた。日本人独特な言いまわしとか，考え方では，とても外国人に理解してもらえない。特に日本語を英語に変えてみると，すぐわかる。

自分でも，この言葉を入れたが，はたして自分は何が言いたいのか，はっきりわかっているのだろうかと首をかしげることしばしばである。「やはり」とか「結局」はまだいいほうで，「〜にあたって」とか，文と文をつなぐ変な接続詞にはあいまいさが目立つ。これでは外国人は，何が言いたいのかハッキリしろ，と言いたくなるだろう。不可解な人種だとも思うかもしれない。「私はこう思っている」，「こうするつもりだ」と結論というか自分の考えをハッキリさせておいて，「というのは……の理由によるため」と説明していくと，私達の考えもわかってくれるようだ。

ザンビアに3年間いたわけだが，ただザンビア人だけというわけではなく，アフリカの国々の人，ヨーロッパ人，アメリカ人達とも友人になったが，皆，我々日本人ほどはあいまいな言い方はせず，ハッキリとものを言う。それぞれ違った考えを持っているのだが，なるほどと納得させられる。自分の考えをハッキリと説明できるのが国際人の第一歩だと思う。どんな幼稚なことでも自分の考えを持ち，説明できれば，皆から意見を聞いてもらえる。今の日本のおえら方はもちろんだが，我々外国へ出るものも，是非ともあいまいな発言はせず，ハッキリと言いたいものだ。

とにかく3年間で少しかもしれないが，そのことがわかっただけでも勉強になった。そしてアフリカ人の考えは「俺達は，もう独立したのだから一人前の国になったのだ。他の国の意見は意見で俺達は俺達でやっていくのだ」と思っている。ヨーロッパ人はというと「俺達の国がなかったら，この世界はメチャメチャになってしまう。まだまだ世界の中心」といった自負を持っていること，アメリカ人（日本人にも言えそうだが）には「今の世界は俺が中心になって動かしているのだ。世界一はすべて俺の国。金持ちだ，世界一の」といった大きな態度が見られ，おもしろかった。ほとんど皆が皆，自分の国を愛しているのが，言葉に出てくる。本当によかったと思う。協力隊に参加しなかったら，未だに日本という殻から外を見て，「何で，また日本はこんなに努力しているのに」などと自分勝手な考え方をしていたことだろう。他民族，それもアフリカなんて熱いところで裸になって動物を追いかけ回し

ている人種としか考えていなかったことだろう。恐ろしいことだ。これからの日本はますます国際化して，工業国，途上国を問わず，いろいろな国々と文化交流，経済交流をしていくことになるだろうから，私達のように人種偏見を持たない人達が増え，日本人が国際人として通用するようになりたいものだ。我々は同じ地球という星に住み，同じ姿をし，同じことに喜び，悲しみに泣いていることを理解すれば，人種差別などという言葉は消え，平和な世界がつくれると確信する。

DCA/103/43/6

Department of Civil Aviation,
P.O. Box 105,
CHIPATA
Date.....

The Director of Civil Aviation,
P.O. Box RW 137,
LUSAKA.

Maintenace of Telecommunation and Navaids Facilites.

Report for the Month of.....

Transmitters.

1. AEROCOM 4463/No. 862 8110 6792 4507 Khz. W/T Main
   CW用A3 送信機 メイン, 5台 W RT切り
2. RCAL TA83C S/No. 564 5350 6952, 10367 Khz USB R/T Main
   SSB用 送信機 メイン. 5台 W RT切り
3. PYEP ptC 351 S/No. 0552/0499. 118.3 MHzVHFMain
   地対空用VHF AM 送信機 メイン
4. PYE T30AM S/No. 4867. 118. 3MHZVHF S/BY
   地対空用VHF AM 送信機 スタンバイ. (オ・ソトンジ式)
5. PYE PTC931 S/No. 75078/75317. 8110,6792, 4507 Khz. W/T S/BY
   CW用 移 送信機 スタンバイ. 1台 W RT切り
6. RACAL TA104H S/No. 261. 5350, 6952, 10367 Khz USB R/T S/BY
   SSB用送信機 スタンバイ, 2台 W RT切り
7. SSB130F S/No. 2332. 3410/6552/8956 KHZ. USB TELS LIAISON.
   地基地・間駅・無線受信所用 SSBトランシーバー. 100W RT切り.
8. PYE W5AM S/No. 55815. 118.3MHZ VOR SITE.
   地対空, 地対地用 AM トランシーバー. 無線受信所用

※ 上記の送信機, トランシーバーは すべて長時間
保守の程度 ロロ

1. 毎日 ルレーの動作不良が多く ルレーに関する部品・電話器等を交換する必要があった。又日 非常数切替スイッチ不良に又点があり, 切替に使っていることもあり, 長時間に亦なれる。又それにより 資源回路にもそれた。3. 故障が4回 5. 資源回路に又点あり 長時間運用するとトランス, 抵抗器がオーバーヒート 損傷を受ける。1. 1回 2. 1回 3. 1回 5. 1回 8. 1回 計 5回

5台 長時間運用のため 定期的に 長時間の交換を要する。

No. 15

RECEIVERS.

1. RACAL RA222 S/No. 115. 8110, 6792, 4507KHz W/T Main.
CW,ダブルトランジスター受信機
2. RACAL RA222 S/No. 148. 8110, 6792, 4507KHz W/T S/BY.
〃
3. RACAL RA222 S/No. 107. 5350, 6952 10367KHz USB NATS Main.
〃
4. RACAL RA222 S/No. 101. 5350, 6952, 10367KHz USB NATS S/BY.
〃
5. PYE PTC704 S/No. 4195. 118.3MHz VHF S/BY.
AM受信機 VHF真空管式
6. PYE PTC704 S/No. 1283. 112.9MHz VOR MONITOR.
〃 VORモニター用
7. PYE R6AM S/No. 3276. 118.3MHz VHF MAIN.
AM受信機 VHF オールトランジスタ式
8. PLESSY PVR525 S/No. 0111. 2333, 2357, 2267, 5121.5, 6807, 7913KHz.
RTTY用受信機 オールトランジスタ式
9. REDIFON R50 S/No. 409. MONITOR.
NDBモニター用, ATC用受信機

NAVAIDS.

1. REDIFON G91 S/No. 20. 218KHz. Main.
NDB送信機
2. REDIFON G40 S/No. 151. 218KHz S/BY.
〃
3. CE29 VHF RECEIVER. 118.3MHz.

4. IAL BEACON MONITOR TYPE 8503A S/No. 32. 218KHz
NDBモニター
5. WILCOX VOR 483. 112.9MHz. Main.
VOR
6. WILCOX 483. 112.9MHz VOR S/BY.
VOR

※ RA222受信機は同一周波数切替に用スイッチがにぶくなり誤動作
不良と 然しながら 5.6は整流管を意図的に取り替えた為
7.8の受信機より故障知らず。
NAVAIDSのほうは故障多数 皆が20年間以上使っているため
古いものである。部品の入手不可能なものもある。
VORはフィリップの機械であるが古いためリレーの接点不良が多い。 No. 16

OTHER EQUIPMENT.

1. MF5AM MOTAFONE S/No. 310799. 80.0MHz GRZ.153E.
VHF AM送受信機
2. MF5AM MOTAFONE S/No. 4279. 80. OMHz. 536D.
〃
3. MF5AM MOTAFONE S/No. 4291. 80. OMHz.
〃
4. W30AM S/No. WW91. 301..80. OMHz. GRZ 754F.
〃
5. CYCLOC BATTERY CHARGER S/No.57659.
充電器 (バッテリー用)
6. CYCLOC BATTERY CHARGER S/No. 57657.
〃 (〃)
7. PW14E AERIL MULTI-COUPLERS/NO.1140.
受信器用アンテナ分配器(ビル内、屋内用)
8. PW14AERIAL MULTI-COUPLERS/No. 1931.
〃
9. PTC 455 EXTENSION UNIT.

10. AERIAL FARM.

11. GENERAL.

12. OUTSTANDING I.D.V.S. (Internal Demand Vouchers)
バーン未納分.
注文

DCA /103/44/6.

Department of Civil Aviation,
P.O. Box 105,
CHIPATA.
Date.....

The Director of Civil Aviation,
P.O. Box RW 137,
LUSAKA.

MAINTENANCE OF POWER SUPPLIES: CHIPATA.
MONTHLY REPORT FOR.....

1. GRZ.13-208. Ruston & Hornsby type 6YC Engine No. 407913. Brush 40KVA, 3 phase Alternator S/No. 2D/671081. Beacon automtic changeover system.

Site	Kanjele Hill
Hours run during the month	
Unserviceabilities accountered during month	
Details of maintenace carried out during month	
Fuel & Oil stocks	
Present serviceabilty	

※ 非常用電源 VORにあるが、現在 自動切替装置が故障. Lusakaの workshopで修理中のため 運転中止である。
数箇所の問題があり うまく動いていないようである。
又、メインライン上は MSD, PWT, ZESCO等設備のメンテナンスが不行届になっている。

2. GRZ. 13-312. Ruston & Hornsby type 3VSM Engine S/No. 393477.
McFarlane Magnicon 27.5KVA alternator S/No. 40390E.

Site	Transmitter Station
Hours run during Month	
Unserviceabilities encounterd during Month	
Details of Mainenace performed durin Month	
Fuel & Oil Stocks	
Present Serviceability	

OFFICER IN CHARGE

※前述のものは明じであり、メーカーホートのもの。以外又月間の消耗品の欠陥、故障ヒンと思われるものスペアパーツが多く今期で欠如している状態である。それにガソリンが少いもの。

REPUBLIC OF ZAMBIA.

DEPARTMENT OF CIVIL AVIATION

TELECOMMUNICATIONS CIRCULAR No. 179

GUIDE LINES FOR RADIO ENGINEERS SERVING ON OUTSTATIONS.

ボランティアに参考と思われるところを多いでいる。
内野 明

1. INTRODUCTION

The situation arises from time to time when a Radio Engineer with little privious experience in Civil Aviation is posted to an outstation. While the Engineer in quation is capable of discharging the technical aspects of his work, there are certain administation duties with which he is unfamiliar and which present difficulties.

Accordingly, the object of this circular is to give some guidance to Radio Engineers serving on outstations and to assist them in the efficient discharge of their duties.

2. DUTIES AND RESPONSIBILITIES

When serving on an outstation, or to give it its official title, a Secondary Aerodrome, the Radio Engineer is directly responsible to the Officer in Charge of the station for the maintenace and overall efficiency of all Departmental telecommunications equipment. The Officer in Charge is responsible to the Director.

At Headquarters, the Chief Telecommunications Officer is responsible. to the Director for all aspects of the Telecommunications Branch. The chief Telecommunications Officer is assisted by the Senior Telecommunication Officer(Engineering), the Senior Telecommunications Officer(Operations), and the Higher Telecommunications Officer(Maintenance).

All correspondence with Headquaters must be addressed to the Director and not to individual officers, The correct procedures for communicationg with Headquarters is detailed in "Departmental Instruction No. 1/70" dated 25th February 1970. All staff should be familliar with the contents of this Instruction.

When corresponding with Headquarters, it is essential that correct File references are used and correct procedures adopted. A full File Reference is available on each station. The Telecommunications Branch uses what is referred to as the "400 Series." As an example, a Radio Engineer serving at Mongu whose station designation is 28, would be mainly concerned with the following files:-

402/28	Planning and Construction	:Mongu
403/28	Maintenance of Facilities	:Mongu
404/28	Maintenance of Power supplies	:Mongu.

Official correspondence relationg to the technical functoning of the station should either be signed by the Engineer and addressed u.f.s. the Officer in Charge or signed by the Engineer"for Officer in Charge." It is left

to the discretion of the Officer in Charge to decide which method shoud bu used but the important factor is that the Officer in Charge must be aware of all official correspondence and reports originated by Engineer.

On urgent matters relation to the running of the station, Headquaters may be contacted on the Telecommunications Branch liason circuit of 6552 KHz.

Hours of attendance for duty are as laid down in Tels Circular No. 176. it must be appreciated however that Radio Engineers will be expected to report for duty outside those hours when called out to attend to a fault of to clear some fault which is inconvenient to attend to during operational hours.

3. MAINTENACE OF FACILTIES.

The maintenace work which Radio Engineers are required to carry out on their stations can be divided into two categories. corrective maintenace and preventative maintenace.

Corrective maintenance must be given priority at all times and faults on equipmaintmust be attends to with a minimum delay. WHEN A FAUL HAS NOT BEEN CLEARED WITHIN SIX HOURS, HEADQUARTERS MUST BE ADVISED BY SIGNAL. Details of the procedur to be adopted in such cases are contained in Tels Circular No. 175. It is emphasised that this applies to deterioration in services as well as unserviceabilities and covers both main and standby equipment. Headquarters should again be notified by signal when the facility has been restored. Should assistance or asvice be required during the period of unserviceability, Headquarters should be contacted on the Tels Liason Network.

While preventative maintenace does not have the same degree of urgency as corrective maintenace, it is of equal importance. This maintenace is based on a daily, weekly, Monthly and Annual basis. In some specialise equipment, there is also a need for quaterly and/or six monthly maintenace. To assist with this work, each station holds a file of "TELECOMMUNICATIONS MAINTENANCE SCHEDULES". Radio Engineers should ensure that they hold Maintenace Schedules for each type of equipment on the station. Should any be missing, duplicate copies may be obtained from Headquarters.

On the question of preventative maintenance, it cannot be too strongle emphsised that cleanliness is of vital importance. It is quite common to go for period of seven months with ut rain. During this time, dust can accumulate rapidly and leads to all sets of trouble if the equipment is not cleaned and blown out at regular weekly intervals. Blocked air filters cause overheating and dust which is allowed to accumulate on transformers etc., leads to arcing and other component failure.

It is recommended that Engineers on outstations work out some methods by which they are going to carry out their maintenance duties. It is frustorating and time wasting to work hephazardly from one piece of equipment

to another. At most outstations there is the Control Tower, the A.F.T.N., theEquipment Room, and the Transmitter Station. At Chipata and Mongu, ther is the VOR and VHF respectively. From this, it will be seen that from Monday to friday, one mornin could be allocated for maintenance at each site. In most cases the weekly or monthly maintenance can be completed in the morning leaving the afternoon free for such work as tiding up cables, cleaning out ducts, or attending to administation duties.

A suggested time table for the day would be as follows. On reporting for dutty in the morning, the Engineer should check with the Officer in Charge and the A.F.T.N. to ensure that no faults are awaiting his attention. He should ten carry out a brief inspection of the Control Building and Transmitter Station to satisfy himself that all equipment is serviceable. He is then free to commence his weekly or monthly maintenance but it is important that he informs the Officer in Charge where he will be working that morning, in case his services are required in a hurry.

Each piece of equipment carries with it a book entitled "TELECOMMUNICATIONS Equipment Maintenance Record Type B". It is essential that all repair work, general maintenance, meter readings, etc.,be recorded in this book immediately such work has been completed. Such books are inspected by Headquaters staff during station inspections. The introduction of this book is covered by Tels Circular No. 7.

NEVER WITHDRAW OPERATIONAL EQUIPMENT FOR MAINTENACE WITHOUT FIRST HAVING OBTAINED CLEARANCE FROM THE CONTROL TOWER OR A.F.T.N.

4. MONTHLY REPORTS.

At the end of each month, two reports must be submitted to Headquarters. The first of these willbbe on the 403 File under the heading of "MAINTENANCE of FACILITIES" while the second will be on the 404 File entitled "MAINTENANCE of POWER SUPPLIES". Copies of previous reports are held on stations and can be referred to for guidance. Where a satellite station is involved, (i.e. The Radio Engineer at Mongu is also responsible for maintenance at Kaona.) a seperate report is required for each satellite station.

Duplicate blank forms for Monthly Report are available from Headquaters.

During recent months a number of inaccuacies have appeared in Monthly Reports. It is not uncommon to receiver signal during the month reporting a transmitter as unserviceable, yet the Monthly Report reflects it as 'fully throughout the month'. In one particular case, a facility was reported fully serviceable throughout the month yet the facility in question had been withdrawn from service some months previously.

Such inaccuracies in Monthly Reports are undoubtedly due to the Engineer committing too much to memory and referring to the previous month's report when compiling the current report. To avoid such inaccuracies Engineers on all stations should keep a "Station Technical Diary". This diary should contain brief daily entries of faults reported, action taken, maintenance carried out, and other relevant entries. At the end of the month, the Engineer would only have to refer to the diary to ensure that his reports are both accurate and in detail.

5. TELECOMMUNICATIONS CIRCULAR.

Telecommunications Circulars are issued from time to time by Headquaters. They are numbered consecutively for ease of filing and ference, and are designed as a guidance to staff and to assist the co-ordination within the Telecommunications Branch.

Most circulars have no direct bearing on the duties of Radio Engineers. At Appendix 'A' to this circular is a list of Tels Circulars which directly concern Engineers and which all Radio Engineers should be thoroughly familiar wih.

6. STATION RECORDS

The Radio Engineer on an outstation is responsible to the Officer in Charge for the accurate upkeep of the following Station Records:-

a. Capital Equipment Ledger
b. Plant, Tools and Equipment Control Ledger
c. S.S.V.R. Sheets

The Capital Equipment Ledger maintained by the Officer in Charge for general equipment. The other two documents refer only to Tels Engineering.

Over the years, most stations have inherited their own system of maintaining such documents. Providing the system is accurate and bears some resemblance to the following recommendations, there is no need to introduce change.

CAPITAL EQUIPMENT LEDGER. This document should be maintained on "Allocated Stores Ledger" forms. (Accounts Form155). Only one type of equipment should apper on each sheet. For example, if there are four Racal RA222 Receivers on the station, they would all be recorded on the one sheet but no other item would appear on that sheet.

Ideally, the Capital Equipment Ledger should be sub-divided into four sections on the following basis.

"A" All Receivers, Transmitters, and Navigational Aid Equipment.

"B" Ancillary equipment such as aerials, coupling units control units etc,.

"C" Test equipment.

"D" Miscellaneous items such as fans, kettles, wall clocks etc.,which are issued for the exclusive use of the Engineering Section.

PLANT, TOOLS, AND EQUIPMENT CONTROL LEDGER.

This should be sub-divided into two sub-sections. The first should record all Diesel Generators and fittings which belong to the Department and the second all station tools.

S.S.V.R. SHEETS (CA Form 38)

This document indicates the normal station stock levels and redord quantities received and used.

In conjunction with the above notes, and on perusal of forms referred to, no difficulties should be experienced in recording entries. Where possible, receipts should be entered in blue or black and issues in red.

Master copies of the above documents are held at Headquarters and are checked against the station records from time to time during station inspections. They will also be periodically inspected by the auditors.

To facilitate the accurate maintenance of Station Records detailed in Section 6, certain supporting documents are required. A description of such document is listed hereunder.

STORES CATALOGUE. Central Stores, at Lusaka International Airport, is a Departmental organisation and should not be confused with Government Stores. The D.C.A. Stores Catalogue held on stations lists all items held in central Stores. It is essential that correct Stores Catalogue numbers are used when ordering spares.

INTERNAL DEMAND VOUCHER. (IDV) (C.A. Form No. 150). This is a numbered book in triplicate with one pink, one blue, and white page. It is used at all times when ordering Departmental spares. Full details should be listed in accordance with the respective columns in the IDV Book. Where possible, the determining the correct item. On completion, the pink and blue copeis should be submitted to Headquarters while the whiteecopies remains in the book for station reference. At the same time, corresponding entries should be made in columns 1,2, and 3 of the SSVR Sheets.

It is important that the pink and blue copoes be sent to Headquarters and not direct to Central Stores as this woul only resul in delays.

The submitted IDV should only contain the signature of the requisitionist. Approval action is taken at Headquarters.

In urgent cases, spares may be ordered by signal to Headquatrers. Such signals should contain full details of the item required together with the IDV number. The IDV shold then be submitted by post in the normal manner.

ISSUE VOUCHER. All spares or capital equipment issued to stations will be accompanied by two copies of an Issue Voucher. The original should be signed and returned to the Issuing station while the duplicate is retained for station record.

All capital equipment and spares which are issued from a station should be also accompanyed by two copies of an Issue Voucher, the original of which will be receited and returned. The third copy of Issue Voucher should be submitted to Headquaters to ensure that the Master Copy of the Station records is amended. The fourth copy remain in the book for station feferrence.

All issues and receipts should be supported by corresponding entries in the relevant station records.

STORE RECEIPT VOUCHERS. The Storees Receipt Voucher would be used in following cases.

a. When spares or equipment is ordered for a station delivered direct without being processed through Headquarter or Central Stores.

b. For items which are purchased locally and taken on station charge.

The SRV Book is in tripricate with yellow, blue an white pages. The yellow and blue pages are forwarded to Headquaters while white page remain in the book, SRV action should be taken for all items received which are not accompanied by an Issue Voucher.

(8. OTHER DOCUMENT AND PUBLICATIONS.

The number of documents held on a station are too numerous to mention in a circular of this nature. However, as few are of direct interest to a Radio Engineer, listed below are certain documents of which he should have some knowledge.

AERONAUTICAL INFORMATION PUBLICATION. This is published by the Department Civil Aviation Organization and gives full information on all facilities and other services available to Civil Aviation within Zambia.

ICAO ANNEX 10 VOLUME 1. This is published by the International Civil Aviation Organization and is perhaps more useful in the planning stages than in the maintenance of a station. However, it does contain all international regulatios and recommendations concerning Aeronautical Telecommunication, and as such, is a useful document. with which to be familiar.

GENERAL ORDERS. This covers generalconduct, rights, and privileges when in government service.

STORES REGULATIONS. This cover in greater detail the points outlines in Sections 6 and 7 of this Circular.

It is not suggested that Radio Engineer should become fully acquainted with the above mentioned documents but they should be sufficiently familiar

with them to enable the being used as reference books.

9. TRANSMITTER ATTENDANTS.

A number of Transmitter Attendants are posted at each station to assist Radio Engineer with his duties. Duties and Responsibilities of Transmitter Attendants are listed in Tels Circular No. 159.

Whenever possible, tuition and instruction should be given to Transmitter Attendants to enable them to increase their skills and obtain a higher grade.

10. CONCLUSION.

This circular is not intended as a comprehensive quid on the duties of Radio Engineers on outstations but is merely sintended to assist with the bassic principales. Many important aspects have not even been touched upon. Among those are use of Goverment transport, Telegraphic Addresses, and many other items which form part of the daily duties. However, the Officer in Charge of the station is familiar with such regulations and will be in a position to offer guidance.

The Officer in Charge and Telecommunication Branch officers at Headquaters are always availabe to give or assistance when required.

日本に帰って考えること

今野　明

このたび，私の総合報告書が，隊員報告書集ザンビア編に掲載されるということですが，光栄なことと喜んでいます。しかし，送られてきた報告書のコピーを読み返すと，何となくまとまりのない文章のようで，勉強不足を感じました。内容に関しては，これを書いたのが半年ぐらい前ですが，それほど月日もたっていないので，現時点での所感に変わりはないようです。ただ少し自分はボランティアであるということに固執しすぎて書いた所が，多々見られます。それほどボランティアなのだからと，構えることもなかったような気がしています。しかし，この3年間のボランティア生活は，実に私にとって有意義な期間だったと確信しています。私はこの春，アフリカの，ある国にＴＶ会社のファクトリー・マネージャーとして行くことになりましたが，ボランティアとしての経験が，大いに役立つものと期待しています。南北問題，カルチャーショック，人種問題など，ひととおり経験し，技術，語学等の面でも，心配することなしに力いっぱい働けるものと思っています。これから日本は，どんどん国際化していくものと思いますが，そのためにも若い人達は，積極的に外国で働く機会があれば行くべきだと考えます。海外旅行なんかでは絶対につかめないものが得られるものと信じます。ＪＯＣＶの隊員として行くのも，その一方法ですが，勤務地が途上国ということで，ためらう人達も多くいるはずです。しかし今我々が見なれている文明世界とは，全く違う国で働くということは，一番勉強になるし，世の中がずっと広く見えて，楽しくなると信じています。では，途上国で協力隊員の皆様に逢えることを楽しみにしています。

今野隊員の報告書を読んで

大井田　清

青年海外協力隊の隊員を選考する立場に立ってからすでに２年半になるが，無線通信の分野の試験問題を作成する際，あるいは隊員から送られてくる報告書に目を通す時，この分野の隊員に要求される能力とは一体何なのかといつも自問させられる。隊員のレポートには，現地での生活の不自由もさることながら現地の無線設備が古い故にその保守に四苦八苦する苦労話がしばしばある。

我が国もおよそ３０年前は，無線機はすべて真空管式であった。しかし設備が旧式であっても運用が停止することのないよう，それに見合った管理保守体制がきちんと敷かれてきた。一方，隊員が派遣されるような発展途上国では，歴史が浅いことと経済的余裕がないため，設備の維持運用体制が往々にしてちぐはぐである。その例として技術者の不足，保守用の測定機，部品の不備があげられる。このようなちぐはぐを改善することが，途上国の離陸にとって重要なことなのではあるが，これは一朝一夕に達成されるものではない。我が国はこれに１００年近く要した。いつかは彼らもこの水準に到達するに違いないが，それまでの間先進国のもてる人的能力をもって途上国を助けるのがボランティアの活動であろう。今野隊員の場合，それが航空局の無線設備の保守ということであったが，相手国から懇請され，この方式が定着して頼りにされているならば，大変喜ぶべき事として評価すべきであろう。

彼らが自立の努力をしないで，このような穴埋めに協力隊が利用されるのではないかという懸念は誰しももつものであるが，彼がせかつくことなくこの国のために役立つことをやるのだという決意をもって任務を遂行したことには筆者も共感を覚えるものである。

技術の面接試験を行なう際，相手国が求めている職種にぴったりの適任者を探すことは困難を極める。多くの隊員の場合そうであるが，学校教育しか受けていない者は，理論的知識はあるが，全く見た事もなかった機器の修理作業を十分やれるかが不安であり，逆に職務経験のある者は，そのやってきた分野についてはかなり深い知識はあるが，極めて限られた分野でしかない。ある意

味ではアマチュア無線機をいじってきた者の方が，実践的な適応力があるかもしれない。しかし，無線通信の分野は目に見えない電子の流れを相手とする故，とりわけ専門技術に対する基礎的素養，理解力が重要であろう。あとは現地で応用力を働かせるしかない。彼の場合，アマチュア無線で培った経験に加えて，やるしかない，と早く決意を固めてマニュアルと首っ引きで頑張ったことが好結果をもたらしたものと思われる。

今日では，発展途上国の人々とのかかわり合いは珍しいことではなくなった。毎年やってくる研修生に対する講義，こちらから出かけていく技術協力のための調査団等々，筆者も十数年前フランス政府が行なう技術協力の給費生として途上国の人々と毎日机を並べたことがあった。その人々との間には育った環境の違いからくる生活態度の差は感ぜられたものの，人間性の差は人によるもので，どこの国の人間は親切だとかいうことはなく，その欲するところもほぼ同じであるとの見解をその後もち続けている。今野隊員が現地で抱いた疑問，途上国に対し近代化，物質的豊かさを促すことが，果してその国の幸せにつながるかということは，技術協力の仕事に関係した人々が一様にもつ疑問であろう。国内においても，過疎地の残された自然，純朴なる人間性によって象徴される「幸せ」と都会の押し合いへし合いの「苦闘」を対比して論じられる。しかし前者を是とする論拠には，都会人から見た，あるいは進んだ国に身をおいた身勝手さが潜んではいないだろうか。今野隊員がその場に住んでみて日常屈託のない表情を示す住民の中に，毛布がほしい，洋服がほしいという声を聞き，自分なりに思索した上でやはり途上国は先進国に近づくべきだという結論を見出しているのは現地でじかに民衆と接した隊員ならではと評価できる。

ボランティア活動は途上国の足りない人的能力を補ってやることの他に，途上国の身になって考えようとするところに，もう一つの意義があるのではなかろうか。ただ実情を見てくるだけなら，日本という恵まれた国を再発見し，この国で生まれたことを感謝することで終わるだろう。途上国の民衆と交わりながら生活し，一見無表情な民衆の中に潜んでいる願望を理解し，この国に何が必要なのかを理解することが，途上国の人々との間の連帯感を深める上で大切なことではないかと思われる。

今野隊員の場合，現地での生活環境が比較的恵まれていたせいか，生活上の不平が少なく楽観的で，解決をあせる性急さがなかったように見受けられる。ボランティア活動は息の長い仕事であり途上国の目前の現象に目を奪われればあせりも出てこよう。しかし一歩退いて物を考え自ら反省し，自分の任務を前

向きに進めるしか道はないのだという答えを自ら早く導くことが現地での活動を進めていく上で重要なことではないかと思われる。この貴重な体験が彼の血となり肉となって，今後の社会人としての活躍の糧となることを願ってやまない。　（青年海外協力隊技術専門委員＝無線通信）

カルチャーショックの連続だった2年余の生活

総合報告書（52年4月～54年4月）
54年6月1日記
派遣国　ザンビア　51年2次後期組
職　種　自動車整備
氏　名　吉田　繁
配属先　Department of Civil Aviation, LUSAKA

吉田隊員の略歴

氏　名	吉田　繁
生年月日	昭和28年9月13日
出身県	山梨県
職　種	自動車整備
派遣期間	52年4年～54年6月

希望と使命感，そして，ちょっぴり冒険心と野望に胸ふくらませて日本を発ったのが，もうずっと昔のような気がする。今2年の任期が終わり，そして約2ヶ月の任期延長をし，その任期も終わろうとしている。

1週間後にザンビアを去らなければならないわけであるが……。ここに特にザンビアの2年間の生活状況，人間関係，隊員の価値観について，2年間のうちで数少ない報告書ではあったが，業務報告書を兼ねて最終報告をしたいと思う。

Ⅰ ザンビアの生活状況

"ザンビア"，ザンビアというより，アフリカといったほうがいいのか，私達日本人にはザンビアといっても，ピンとこないし，多分，大半の人達が知らないのではないだろうか。まして，アフリカといっても，踊るハダカ民族，ジャングル，そしてテレビでおなじみの「野生の動物」で見るような，ああいう光景を思い浮かべるのではないだろうか。

そして事実ザンビアへ赴任が決まった時，ザンビアなど知らず，2年間生活できるのだろうかという不安がないわけではなかった。ところが実際ザンビアへ赴任してみると，物があるのにはビックリしたし，首都ルサカには近代的なビルが立ちならび，開発途上国というイメージからしてみれば，欧州の国にいるような錯覚さえ感じた。

私の赴任地は首都ルサカで，住居は中心街から5～6キロの所に位置していた。ザンビア政府の管理であるガバメントホステルで，日本で言う寮を思わせるような一室の，こじんまりした所だった。バス，トイレは共同で，向かい合わせの住居者どうしが共同使用していたわけだが，とにかく使用後の洗浄がなく，仕事上毎日バスを使用したい私にとって，使用すれば使いっぱなしで，使用するよりは洗浄時間の方が長く，まして毎日使用できるとはかぎらず，たいへんな毎日であった。

ところで，ザンビアの住居，住宅事情は深刻で，ザンビアへコントラクトで来ている人達でさえ，家族用のフラットもしくはハウスがなく，しかたなくホステルに住んでいるような状態であった。

ガバメントホステルから配属先のワークショップまで23キロ位あり，毎日バイクで通った。勤務時間が朝8時からのため，少し早く出勤しなければならず，慣れるまでの2～3ヶ月というものはほんとうに辛く，それに，その当時，カウンターパートもおらず，仕事もなかったので，毎日がすごくき

つかったのと同時に，仕事に対し時々挫折感におちいった。５月の中旬から仕事を始めたが，ちょうど雨期が終わり乾期に入った時で，時期的には寒くもなく暑くもなく，日本の秋を思わせるような毎日の生活だった。

内陸国ザンビアにとって総ての輸送網は鉄道，陸路，空路であり，その中での道路の重要性というのは，この国の心臓部であり，首都ルサカを中心に放射状に伸びている幹線道路は，総て舗装されていて，一般的に他のアフリカ諸国に比べて道路事情はよい。毎日通勤に利用した道路はグレートイーストロードといって，ルサカから東へ６００キロ位行ったところにあるチパタという町まで延びており，舗装されている。その道路をチパタへ向けて１０キロ位行くと，エアーポートへ行く道とわかれるが，その道路を通って通勤していた。

毎日の通勤が朝の通勤ラッシュの時間帯とぶつかるため，とにかくワークショップへ行くのに約３０分はかかる。ましてエアーポートへ行く道路なので交通量も多く，慣れるまでは運転するのが恐かった。

通勤に慣れ，仕事にも慣れた頃には寒くなり，通勤中に寒さを少しでもカバーしようと工夫して，最後にはアノラックを頭まですっぽりかぶり，顔はタオルで防御し，サングラスをかけ，まるで赤軍かゲリラのように……。そんなわけで，ワークショップに着いた時には，もう仕事どころではなかった。

そして，無理をしたことにより疲労が残り，とうとうマラリアにかかってしまった。ルサカにはマラリア蚊がいないということだったので，多分現地訓練地だったウンドラでマラリア蚊に刺されたのではないかと思う。

ルサカから東へ約６００キロ位行った所にチパタという町があり，その町から北へ約６０キロ位行った所にザンビア唯一のナショナルパークがあるが，８月～１０月にかけての観光シーズン中には外国からの観光客で賑わう。ザンビアでの生活，仕事に慣れた頃，航空局でそこに観光用のエアーポートを建設するというプロジェクトがあった。それに必要な建設資材を輸送するために車輌を使用したわけで，その車輌の保守整備に忙しかったし，私自身が現地へ２回ほど行って，車輌及び発電機の修理のため出張サービスもした。仕事がなかった時に比べれば，仕事が入ってきたという安堵感はあった。そして無理をおしても，なんとかしなければならないというような使命感に燃えていたのかもしれない。しかし，それがかえって仕事の面は別問題にして，結果的には自分自身に対して悪い結果になってしまった。

マラリアのために４０度近い高熱が１週間つづいた時は，ほんとうに辛か

ったし，食事などほとんど喉にとおらなかったし，よくなっても1ケ月位は仕事ができなかった。マラリアといえば，ザンビアの医者はほんとうに信用にならない。というのは患者に対し間違った診断をする。なにも検査せずに，どうしてわかるのだろうか不思議でならない。

ザンビアには，ＵＴＨというルサカ唯一の医療施設を持った病院がある。医療施設も唯一で，各地方からも患者が診察を受けにくる。しかし，ＵＴＨで働いている医師は，ほとんどがコントラクターで，大半がインド人であった。そして前にも言ったように，なにも検査せずに診断するような医者がほとんどである。医療設備もプライベートの病院にないような物まであるのだから，もう少し医療対策を考える必要性があるように思うのだが……。

ザンビアは物があるようでない。海がない内陸国なので，南はローデシアモザンビーク，南アフリカから，東はタンザニアからというように，生活必需品の７０％位までを輸入で賄っている。

ルサカの町にはＣＢＣというザンビア政府が投資している大きなマーケットがある。日本のように１日に１日分の料理に必要な品物を買うのではなく，１週間なら１週間分まとめて品物を買うというような日常習慣である。私はホステルに住んでいた関係で食事の心配をする必要がなかった。ところがホステルの食事は毎日同じメニューで変化がなく，たまにはホテルで食事をするようにした。ホステルからワークショップまでは遠かったし，昼休みには帰ってきて昼食をとるということは可能であったが，時間的に余裕がなかったために，食べない時もあったし，ワーカー達と一緒にシマを食べたり，たまにはエアーポートの中のレストランで食事したりした。

ワークショップは週５日で，土，日曜日は休みであった。赴任した頃，週末にはよく映画を見に行った。ルサカには娯楽施設がなく，余暇活用面では，ルサカのような都市的環境では地方のようにコミュニティーの媒介は期待できない。そして，つい日本人仲間とのつき合いが多くなっていく。日本人の短所でもあり，長所でもある。しかしザンビアへきてまで日本人とつき合うのも，どうかと思った。

ルサカには映画館が７軒あり，毎日午後から上映されていた。日本でのように繰り返し何回でも見られるのではなく，１回きりの上映であった。そして上映される前にザンビアの国歌が流れ全員起立。その光景には，なにか複雑な気持ちを覚えた。

またルサカにはスポーツクラブがあり，私もテニスクラブに入っていた。

英語をうまく話したいという願望もあって，白人とコミュニケートする唯一の社交場でもあった。友達を持ちたいということからナイトスクールにも通った。しかし午後5時半から2時間，週2回ということもあり，仕事が忙しければ毎週は無理であった。

Ⅱ　業務内容と人間関係

ザンビアの自動車の普及率は近隣諸国に比べると，近年，増加の傾向にあった。自動車も工業製品も先進国並みに使用，利用されている。これらは輸入によるものであることは容易に判断できる。自動車は使用すれば壊れる，壊れれば直す，ということで修理の必要性が生まれてくる。しかし開発途上国の場合，自動車の取り扱いかたは，先進国に比べると無謀運転が多く，車のアクセルにしても余裕など持たさず，いっぱい踏みこんでいる。そういうものだというのがザンビア人の自動車に対しての観念であった。

私は配属された無線関係のワークショップで，二人のメカニックと私のカウンターパートと共に，ワークショップで使用されていた車輌の保守整備を業務としていた。メカニック達には自動車の知識はあまりないが，経験があるために，仕事の手順は心得ている。しかし，時として彼らの誤りに気がついた私が，ついつい大きな声でどなってしまうことがあった。語学力不足から高飛車に彼らを押えつけると，プライドを傷つけられた彼らは，私と共に仕事をしようとはしなかった。

自分の知らないことを学ぼうとする意欲は充分にもっているが，一度プライドを傷つけられると，私など信じ難いほど彼らは怒る。また学ぶ意欲はよいのだが，一度にすべてをマスターしようとするので，それが自分の手におえないようだと，すぐに諦めてしまう。どうも深く掘り下げて学ぶのは苦手らしい。まして車輌整備に対する基礎がしっかりしていないため，結局，保守整備というより，パーツ交換の後処理整備であった。

ワークショップでは無線関係の仕事のトランスポートとして8台の車輌が使用されていたのであるが，コンスタントに使用していたのは4台で，あとの残りの車輌については部品の供給が悪かったために放置状態であった。総てのガバメントで使用している車についての部品の供給はＭＳＢからで，ＭＳＢに部品がなければ，いつ部品が供給されるのかわからない状態であった。

ましてワークショップの仕事内容が限定されているので，エンジントラブ

ルなどのように大きい仕事に対しては，ＭＳＢへ依頼してしまう。しかし，ＭＳＢでも，部品の確保が出来ないために，オーバーホールの必要性がある車輌が，部品待ちのためずらりと並んでいた。それでオフィサーインチャージと，２台の車輌から１台の車輌を生かすようにしたらどうか，というような案を出して話し合ってみたが，語学力不足だった私にとって意思表示をするのはたいへんだったし，相手にあまり理解されなかった時は，ほんとうにコンプレックスにおちいった。

２年間の任期中は，私にとってショックの連続であったといえる。日本で考えていたこと，体験したことが，一つ一つ否定され，打ち消されていく毎日だった。しかしザンビアで私を感動させたのは，この国には競争がない，人びとは他を押しのけて自らを誇示するようなことを決してしない，そういう社会なのだということである。

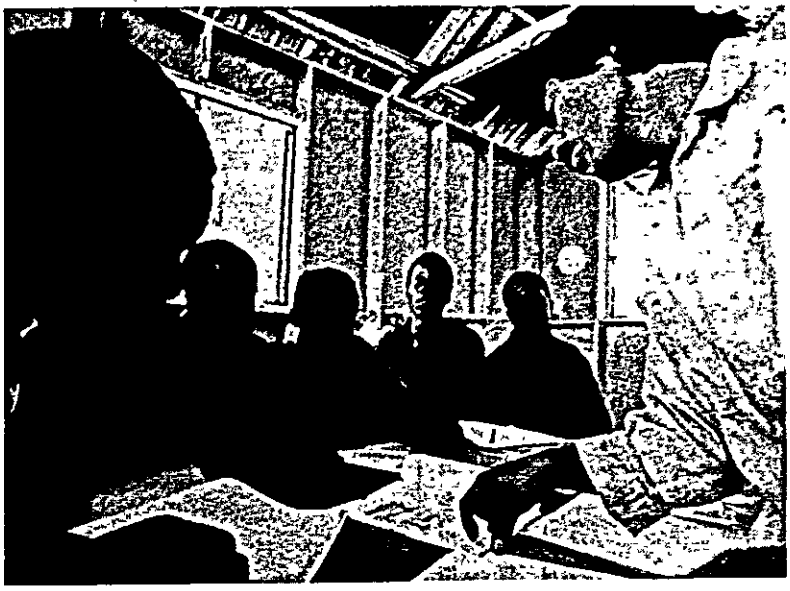
日本という競争社会で育った私にとって，そのことはショックですらあった。

人間だけでなく，動物たちもあくせくせず，自然との調和において生きてきた。食料不足に耐え，病気に強く，人工的な改良が加えられていない動物たちが，ザンビアにはいた。

認識は教育によっては変わらない。体験によってのみ変えられる。

第三世界の開発は，特に生活環境を尊重し，開発の意味をよく考えて対処しなければならないと思う。それが２年間の体験で得た私の開発途上国への協力の理念である。２年間，ほんとうにありがとうございました。

昼休みにザンビアの仲間たちと



テキストで訓練生に実習している

吉田隊員の報告書を読んで

上川修二

ザンビアにおける2年間の協力活動の中での生活上，仕事上の苦労あるいはアフリカの風土に対する観察が，冷静によく表わされている。

仕事をする上で重要な要件の一つとして，職場における人間関係があげられる。特に人間性，生活習慣，言語等あらゆる点で異なる開発途上国に対する技術協力を行なう場合には，この点が最も大切なことがらといえよう。吉田隊員の報告書にもあるように，隊員は往々にして過大なボランティア精神から技術協力面あるいは生活面においても，性急に真面目に行動し失敗を招くようであるが，その国の人間性をよく理解して，もっと大らかな気持ちで対応すべきではないか。その点，テニスクラブへの入会，ナイトスクールへの通学等，吉田隊員の行動は適切なものとして評価される。（青年海外協力隊技術専門委員＝自動車整備）

地方の獣医学研究所充実に活動の力点

総合報告書（52年10月～54年10月）
54年10月14日記
派遣国　ザンビア　52年1次後期組
職　種　獣医師
氏　名　関　高樹
配属先　Central Veterinary Research Station, MAZABUKA

隊員の略歴

氏　名	関　高樹
生年月日	昭和27年11月15日
出身県	埼玉県
職　種	獣医師
派遣期間	52年10月～54年10月

Ⅰ 序　言

1. 派遣の背景

私は獣医及びツエツエバエ防除局に属する，この国唯一の獣医学研究所（Central Veterinary Research Station）に派遣された。過去，数多くのすばらしい研究がなされたこの研究所も，独立後の十数年間に，多くの外国人研究者は去り，予算も縮小されて，日常の診断業務を続けるのが精一杯の状態になった。ザンビア各地で発生する家畜や野生動物の伝染病の病原体究明，人獣共通伝染病である狂犬病の診断，人工授精普及による家畜の品種改良及び被害の大きいトリパノソーマ感染症をおこす原虫を運ぶツエツエバエの生物学的研究など，この研究所の経済的，社会的意義は極めて大きい。

技術レベルにしても，西欧諸国に比べ，さほど劣らなかったであろう。しかし，独立当時から働いているテクニシャン達は，外国人研究者から知識や技術を修得して各セクションのチーフになることはなかった。彼らはあくまで手となり足となって働いたにすぎない。現在でもザンビア人獣医師は６名を数えるのみで，研究所にはイギリスに留学中の２名が名を留めるにすぎない。事実上，外国人コントラクターや専門家が仕事をしている研究所で，私自身も専門家と同じ待遇を受けることになった。

2. 任務の内容

詳しい任務の説明がなされないまま派遣された私は，研究所長に一般病理担当を命ぜられ，チェコスロバキア人獣医から仕事の引き継ぎを受けた。以後２年間，一般病理担当として，鶏を除く総ての動物の疾病の診断を任された。なお，鶏病病理担当のインド人専門家が休暇の時は，彼の仕事も引き受けた。

前任獣医隊員（中央研究所勤務。途中からナムワラに派遣される）より引き継ぎを受けた“各地プロビンシャル獣医オフィスの研究設備充実計画”は，赴任後１年２ヶ月して，機材と車が届き，各獣医隊員が協力して実行に移された。これらの機材はマザブカ，ルサカ，ナムワラ，セナンガ，ウンドラ，ムバラに配置され，残る２セットも１０月の隊員赴任に伴い，チバタ，ルサカ（ニューリサーチステーション）に送られる予定である。当初の予定を少々変更したのは，機材の使い方は日本人獣医ボランティアが直接に指導したほうがよいという意見が尊重されたためである。

Ⅱ 協力活動と成果

1. 赴任した時点での諸条件

赴任後の4ヶ月間は，前任の病理担当者より仕事を引き継ぐのに全力を傾けた。具体的には，書類整理のための英語やラテン語の勉強，及び病理解剖，組織検査，細菌培養，生物学的検査，化学的検査などの修得である。

この時点では，薬品類や診断液なども容易に手に入り，またアシスタントもよく仕事が出来て，仕事はスムースに引き継がれた。

2. 協力活動の前進と成果

鶏病病理を担当するインド人専門家（コモンウエルス財団派遣）は，カウンターパートとしてザンビア人獣医師（ソビエトにて学位を取る）を得て，半年間中央研究所に於て鶏病病理を教えた後，彼をマスターコース修得のためにイギリスのリバプール大学に送った。彼は帰国後，確実に研究者として中央研究所に迎えられるであろう。

私の場合は，一般日常業務の折に，ラボラトリーテクニシャン（University of Zambia またはEvelyn Hone College 卒）やラボラトリーアシスタント及びベテリナリーアシスタント（Zambia Institute of Animal Health 卒）達に知識や技術を伝えるように努めた。彼らテクニシャンやアシスタントが何年しても自立出来ないのは，彼らを研究者の手や足でしかないとするイギリス流の職業意識によるものと考え，一部の仕事に固執している彼らの目を「診断」という全体の流れに向けるよう気を配った。

具体的には，病理解剖の際に彼らを立ち合わせて，彼らの勝手気ままな質問に答えることから始めた。この質問により，想像していたよりも彼らの獣医学の知識がかなり低いことがわかった。脾臓を指さして，この肝臓は色がおかしい，と言う者があるかと思うと，牛の胃が四つの部分に分かれていることを知らない者もあった。テクニシャン達は大学で医学の基礎は習ってきたが，獣医学は実験動物学として勉強しただけであった。彼らは，細菌培養をやらせると上手にペトリ皿を扱う反面，動物のことはほとんど知らなかった。私は彼らのプライドを傷つけぬよう注意しながら，全般的な獣医の知識や技術を教えた。

始めは半ば強制的に病理解剖に立ち合わせていたが，半年ほどすると，4名の者が積極的にくるようになった。この頃を見はからい，鶏病担当者とも相談して，彼らに病理解剖をやらせてみることにした。もちろん我々

は横でアドバイスをした。まずは鶏病など割りと肉眼所見で容易に診断出来る事から任せた。鶏病に関してはかなり効果があった。ニューカッスル病，マイコプラズマ性呼吸器病（ＣＲＤ），くる病，白血病，ガンボロ病などは診断出来るようになった。しかし，牛など大動物の診断は肉眼病変のはっきりした疾病以外は，剖検の他に血液検査，細菌培養，組織検査，化学検査などの総合的な判断が必要なので，ここまで教えることは出来なかった。

彼らの獣医学に関する知識や技術は，以前に比べ格段に向上し，それに伴い日常行なっている検査の意義がよく理解され，検査の結果が以前よりも良くなった。例えば細菌培養一つにしても，以前は器具の滅菌や無菌的操作がかなり無神経になされ，しばしば培地に空気中の雑菌などが繁殖して，検査をやりなおしていた。最近は，そのような失敗が少なくなったようだ。また，組織標本作成に関しても，以前は染色状態が悪かったり，標本が厚く切れていて顕微鏡検査に適さない物が多かった。しかし，狂犬病のネグリー小体確認など，まず簡単な検査を彼らにやらせて，私が確認するという方式にしてからは，標本作成に興味と責任感を持ち，早く美しいスライドを作るようになった。

私と共に働いたテクニシャンやアシスタント達は，私の帰国する数ケ月前に新しいスタッフと入れかわり，以前からいた者達は，２名がナイロビ大学へ留学することが内定し，他の者は地方のプロビンシャル獣医オフィスに派遣されることになった。我々獣医ボランティアと共に彼らが，供与機材を有効に使って良い仕事が出来れば，と思っている。

その他，協力活動としては，現場スタッフの再教育プロジェクトがあったので，講師として授業を受け持った。また農業祭の時などに写真やパンフレットを使って，病気の早期発見方法などをマザブカ地方の農民に説明した。

3. 問題と障害

協力活動をすすめていくうえで，問題はいくらもあった。まず日常の検査に使う薬品類や各種診断液の補充が徐々にむずかしくなってきた事である。これらの品は輸入品ばかりであるため，外貨事情の悪化に伴い品数が減り，検査を中止したり，検査方法を工夫したりせねばならなかった。検査器具もよく故障した。私自身がテスターをあてて修理することも多かった。すばらしい顕微鏡が，ただ光源の電球が手に入らないまま，ほこりに

まみれているのは実に残念であった。消耗品の補充や器具の修理がきわめて困難な状態にあるため，地方の研究設備を充実しても，また，そこに仕事の出来るラボラトリーアシスタントを送っても，十分に機能させることは非常にむずかしい。私はその点も考慮して，なるべく簡単な器具，薬品で確実に診断出来るよう教えてきたが，それにしても最低限必要なものは数多くある。

今後，彼らの興味が物不足のために失われることを最も心配している。

Ⅲ 将来への示唆

1. 相手国に関して

イ）少ない予算で獣医局を改善していくには，まず公私混同を戒めることが必要と思う。特に公用車の使い方には目にあまるものがある。上に立つ者ほどそれがひどい。大切なワクチンや薬品の購入も，ガソリン代支払いのためにかなりの制約を受けているものと思われる。

ロ）プロジェクトの厳選を ―― 獣医局にはさまざまなプロジェクトが発足しているが，どれも中途半端なまま，中断している。資金の見通しがつかぬまま計画をスタートさせ，途中で資金が切れて，そのままになってしまうのである。例えばニューリサーチ計画もその一つである。現在あるマザブカの研究所は１９２８年に設立されたもので，傷みがひどく，１９７５年頃までに新研究所をルサカ郊外に完成させる予定であった。

しかし，今日でも全体の半分ほども完成しておらず，また，一部のセクションをそちらに移したため，２研究所間の連絡がうまくとれず，検査に時間がかかったり，器具の分配がうまくいかなかったり，問題が多い。その他のプロジェクトを列記すると，人工授精普及計画，ワクチン製造計画，獣医トレーニングスクール（Zambia Institute of Animal Health）充実計画，地方研究所設立計画，牛皮利用計画，デイップタンク建設計画，獣医スタッフの再教育，各獣医オフィスへの車その他のトランスポート充実，などである。どれも大切な計画ではあるが，資金の見通しをつけて，一つ一つ完成させていくべきだと思う。

2. 協力について

前記のとおり，獣医局にはすばらしいプロジェクトがいくつもある。これらのプロジェクトの中から適当なものを獣医局側と話し合い，一つ一つ

援助していくのがよいと思われる。獣医師の要請があるからといって，現場にいくら獣医を送っても，根本的な問題解決にはならない。現在ＦＡＯはニューリサーチの設備充実と，ワクチン製造に力をいれている。オランダの専門家は人工授精の普及に協力している。我々協力隊としては，獣医トレーニングスクール(Zambia Institute of Animal Health)への援助が適当かと思われる。現在教師が2名しかいない同校は，２０名のベテリナリーアシスタント学生と２０名のラボラトリーアシスタント学生を抱えて四苦八苦の状態である。講師として獣医ボランティアを送り，その設備が充実出来ればすばらしいと思う（この件に関する私的な要請は同校校長より受けている）。

3. 協力隊事業への示唆

各国協力隊職員は，各国における関係省庁，派遣中の隊員，及び東京本部との連絡を密にして，より有効と思われる職場に適切な隊員を派遣するように努めるべきであり，いたずらに派遣人員数を競うような援助のし方はつつしむべきである。

Ⅳ 結　び

２年間ザンビア国のために働いてきて，帰国近くなるまで，何が一番大切な協力活動であったのかわからなかった。日常業務に熱中すればするほど，客観的に自分の活動を捉えることを忘れていたのである。獣医として病気の宝庫に飛び込んだ私は，唯，病因究明に全力をそそぐことが協力だと思っていたのである。任期が終わりに近づき，私の仕事を外国人コントラクターに引き継いではじめて，ボランティアとしての自分を振り返る余裕が持てた。つまりコントラクターとボランティアの違いである。そこに見い出せたものは，外国留学が内定したり，地方の研究所充実のために最前線に赴任したラボラトリーテクニシャンやアシスタント達であった。総合報告書として彼らとの仕事を中心に書いたのは，２年間での一番大切な協力活動だと思われたからである。

最後に，２年間の仕事が無事に終わり，後任者に引き継ぐことが出来たのは，一緒に働いてくれた研究所のスタッフ達，また，ボランティア活動のよき理解者である獣医局の人々の助言によることを述べ，この総合報告書の結びとする。（注：添付書類は割愛）

日本に帰って考えること

関　　高樹

帰国後のあわただしい日々が過ぎ，日本での生活がやっと軌道に乗り始めた今日この頃である。アフリカと日本では，仕事に関しても生活の面でも格差が大きすぎて社会復帰に四苦八苦している。

満員電車にゆられて会社へ向う時，ふと，アフリカでの生活がなつかしく思い出されることがある。現地でバスに乗った時もやはり満員で，暑く，体臭で息もつけぬほどであった。彼らは貧しい身なりをしていたが生き生きとしていた。日本ではきちんとした服装の人々がみな静かに乗っているが，こちらは同じ人間とは思えぬほどに生気がない。そんな時，人間にとって大切なものは何なのか，つくづく考えてしまう。

日本の大企業の研究所に職を得て1ヶ月が過ぎた。コンピューターを駆使し，ディスポーザブルの器具をふんだんに使い，毎日残業しながら，締め切り日に追われて検査をしている。数ヶ月前までの私は，ザンビア共和国の牧畜地帯にある研究所で，各地に発生する伝染病の診断に携わっていた。使い捨ての器具を何回も使い，骨董品のような機械で，少ない薬品を大切に用いて仕事をした。ザンビアの研究所は非常に貧弱であったが，ボランティアとしての毎日の仕事は楽しくやりがいがあった。社会に対して自分が必要であることを痛感し，また，自分の未熟さを反省する良き人々がいた。毎日が発見の日々であった。見る物，聞く物すべてめずらしく，2年間はあっという間に過ぎてしまった。

今や毎日の生活の中で，2年間の自分が急速に2年前の姿に戻りつつある。しかしアフリカでの生活は私の人生観を大きく変えており，今後もボランティアとしての貴重な経験を生かすべく仕事に励みたいと思っている。日本での仕事も農薬の安全性を調べるという，今後の世界の食糧増産に貢献する意義のあるものだと思っている。今の仕事が間接的に発展途上国の人々の幸せにつながっていくことを願い，新しい環境に早く慣れて，力いっぱいやってゆきたいと思っている。

マザブカにある獣医中央研究所で
ザンビア人の研究者たちと一緒に。
なお後ろにクーラーと扇風機が見
えるが，もちろんクーラーは故障
していた

関隊員の報告書を読んで

松山　茂

数ある協力隊員の活動分野の中でも，獣医師は比較的有利な待遇（報酬ではない）を受ける職種ではないかと思われる。

関隊員もしかり。本人も認めているように専門家としての待遇を受けている。しかしそのことがボランティアとしての活動を何ら制約するものではないはずである。「日常業務に熱中すればするほど客観的に自分の活動を捉えることを忘れていた……」と一時懐疑的であったが，結果的に「ラボラトリーテクニシャンやアシスタント達」との仕事が「２ケ年間での一番大切な協力活動と思われた」としている。私はそれで十分だと思う。ややもすれば協力隊員としての理想を強力に抱き過ぎるあまり，現実とのギャップに悩むことになりかねないことを私は恐れる。

ところが関隊員は，研究所で働いているテクニシャン達が「外国人研究者から知識や技術を習得して，各セクションのチーフになることはなかった。彼等はあくまで手となり足となって働いたに過ぎない 」ことに疑問と不満を持たれたようである。このことは「イギリス流の職業意識によるもの」と考え，イギリス流の職業意識を持たない関隊員は彼等に「知識や技術を伝えるように努めた」のである。

たしかにお説の通り，テクニシャンやアシスタントの積極性の無さは，イギリス流の職業意識がなさしめたものであろう。その彼等に「積極的」に病理解剖に参加する意欲を持たせ，「標本作成に興味と責任感を持ち，早く美しいスライドを作るように」仕立て上げた努力と腕前はさすがとしかいいようがない。しかし，ある程度の（技術）領域を越えての技術を彼等に伝授しようとする時に若干の問題が無いわけではない。すなわち技術分野が獣医師としての職能に及ぶ場合はその国の法規制もあり問題は簡単ではないはずである。例えば，わが国では，獣医師でない者に家畜の診療技術を教え技術を習得させても，彼等には家畜の診療行為は許されない。敢えてそのような行為を行うと，法により罰せられる。欧米のいわゆる先進国の研究所では，日本とは事情が異なり，テ

クニシャンは大学卒であっても（多くの場合大学卒であるが）あくまでもテクニシャンであり，いかに優秀であっても研究者とははっきり区別される。隊員は，派遣された国がこのような文化の洗礼を受けた国であることを一応理解しておく必要があるのではなかろうか。関隊員から技術や知識を習得した現地のテクニシャンやアシスタントが，その後，彼等の実力や能力に応じた職場や地位に配属されなかったり，あるいは，そのために彼等が大いに悩むようなことがないことを切に祈りたい。関隊員が２年間にわたるラボラトリーテクニシャンやアシスタント達との接触が最大の協力活動であったと自己判断されるのであれば，彼等が将来も積極的に活動できるよう，彼等に資格をとるなり，あるいは大学に進学または留学することを奨励すべきではなかったかと考える。発展途上国に意欲ある知日家のリーダーが，あるいは知日家とまではいかなくても日本の青年に刺激されてリーダーとなる者が増えることはＪＯＣＶの本来の目的に反するとは思えない。いかがなものであろうか。

なお報告書中に，各種機器，薬品の補充が困難な状態にあることを憂慮し，そのために「彼等の興味が失われることを最も心配」されるが故に，「なるべく簡単な器具，薬品で確実に診断できるよう教えた」ほどの努力をされているにもかかわらず，「すばらしい顕微鏡がただ光源の電球が手に入らないまま，ほこりにまみれているのは実に残念であった」とあるのはいささか残念である。たとえそれが不可能に近くても，光源装置をはずし，鏡を利用してその他の光源例えば自然光等が利用できないかテクニシャンやアシスタントともども一緒に考えるといった姿勢が欲しかったような気がする。かなり的はずれな提言であればお許し願いたい。

しかし，いずれにしても関隊員は協力隊員としての責務をりっぱに果されている。報告書では正確な表現を避けておられる気配があるが，協力隊の大きな目標である民衆への溶け込みにいささか欠ける所があったとしても，彼の場合まったく気にする必要はない。２年間の貴重な体験を誇りにし，さらにこれから成長を続ける上での「思考の糧」とされることを期待したい。（青年海外協力隊技術専門委員＝獣医師）

NAMWALA の畜産事情と獣医活動

総合報告書（５２年１０月～５４年１０月）
５４年１０月１０日記
派遣国　ザンビア　５２年１次後期組
職　種　獣医師
氏　名　千葉　好夫
配属先　District Veterinary Office, NAMWALA

千葉隊員の略歴

氏　名	千葉　好夫
生年月日	昭和25年9月16日
出身県	千葉県
職　種	獣医師
派遣期間	52年10月～54年10月

Ⅰ 序　言

1. 派遣の背景

日本の2倍の領土といわれているザンビアにほぼ165万頭の牛が存在し，ザンビアの人口約500万人の割合からすると，3人に1人は牛を所有していることになる。まさしく，この国は酪農および畜産王国と考えられるが，実際は牛肉，牛乳および乳製品（チーズ，バター等）などの輸入に頼っているのが実情である。これは，それだけの牛がいるにもかかわらず，生産性を欠いているためであり，主たる原因として伝染性疾患，および各種疾病による高死亡率，また畜主および政府政策の生産性意欲の欠乏などがあげられよう。

こうした状況のもとで獣医師たる我々の使命は主に伝染性疾患および各種疾病の予病，診断，治療に従事しながら，畜主側にあって幾多の指導と協力をすることにより，よりよき酪農および畜産の前進と向上に貢献するものである。そして，Volunteer としての獣医師である私は，さらにその上，私の配属下にあり，Counterpart でもある Livestock Officer，Senior Veterinary Assistants，Veterinary Assistants および Disease Control Guards などに対し，技術指導をするのみならず，私個人のもつあらゆる知識または可能性をも授けるのがもう一つの自主的任務（使命）および Volunteer Activity といえよう。しかし，数名の Counterpart ならともかく，27名の Staff を抱えた私にとって，それは簡単に言葉によって言い表わすことの出来ない複雑かつ困難な自主的使命であったように思われたが，今，私は自ら，Volunteer らしい Veterinary Officer であったと思う。

a) ザンビアにおける獣医・畜産事情

現在22名の獣医師はザンビア人（5名），外国人コントラクター（11名），そして日本人 Volunteer（6名）よりなり，それぞれ Head Quarter，MAZABUKAまたは LUSAKA Veterirary Research Station，Provincial Veterinary Office，District Veterinary Office に配属されているが，ザンビアには9 Provinces，56Districts が存在することから，その数はまったく少ない。

68頁の表1は獣医局の組織構造で，District Veterinary Of-

ficer（D.V.O.）である私はCHOMA Provincial Veterinary Officer（P.V.O. CHOMA）が直接の上司となるが，Volunteerとしての私の，すべての面で上司および相談役となるのは，Head Quarter（LUSAKA）のDirectorまたは，Deputy Directorである。

表IIは，この国の牛の分布状況を示しており，Southern Provinceには694,619頭の牛が飼われており，それはザンビア全体（165万頭）の42.2％を占め，いわゆる最も重要な畜産地区である。そしてそのSouthern Province地区内のNAMWALA Districtには，15万頭の牛が存在し，ザンビア全体の9％を占め，畜産地区として重大かつ重要な意味をもっていることはいうまでもない。

畜主は，その経営方式または，資本的形態から，Traditional FarmerとCommercial Farmerの二つに大別され，ほとんどの畜主が属するのは，Traditional Farmerである。我々は，主としてこのTraditional Farmerに対して大きな努力と援助を注いでおり，我々の技術料だけでなく，治療薬，予防薬の他Dip Tank設備等も無料とされている。他方，Commercial Farmerは我々のアドバイスによって（P.V.O.，D.V.Cの署名が必要），彼等自ら薬品を購入し，その薬品を使って我々が治療，予防等を行ない，また，その他飼育および疾病予防のアドバイスを行なう。Commercial Farmerは，牛の飼育方法，疾病の予防方法，管理の点からもTraditional Farmerより一段と優れており，必然的に牛の体格，健康状態ともに優秀である。

ほとんどの畜主は，もっとも手間のかからないFree Range飼育方式をとっており，中にはNAMWALAのように半遊牧的飼育を行なっている畜主もある。これは最も安価な飼育方法であるが，牛が散乱し，野生化しているため治療までに時間がかかるだけでなく，疾病発見の遅延のもととなり，さらには他群との交流，接触の機会を頻繁にすることから，伝染病伝播を容易かつ急速なものにしてしまうので，我々の業務上，どうしようもない癌となっている。

ほとんどの牛は，Traditional Cattleといわれる雑種よりなるが，中にはゼブ牛，ごくまれにはフリジャンもみられる。我々は昔から飼われているTraditional Cattleがあらゆる熱帯病に強いため，

この地ザンビアに適した牛種であることを認めることができよう。

b) NAMWALAにおける環境および畜産事情

首都LUSAKAから北西に向って350km離れた所に，NAMWALAという小さな町がある。この町に至る道のりは幅広い赤土または砂地の道路を経由するので，いかにもアフリカのイメージを思わせる。MONZEの道路を経て350kmの道のりは雨季になると，至る所の道路が寸断されてしまうので，CHOMA道路経由となり，NAMWALAはいわゆる孤立した町となる。CHOMA経由となればLUSAKAまで500km。それも，雨季には通過不可能の場合があり，NAMWALAはまったく孤立した町となってしまうのである。

私が政府のLANDROVERで泥に塗れながら長い時間をかけて，この町NAMWALAに辿り着いたのは1978年の1月10日であった。その時の静かで，それでいてどこからともなく感ぜられた活気ある町の印象は，忘れ得ぬものとして未だ脳裏にやきついている。

標高950m，近くにKAFUE NATIONAL PARK（2,240km²），KAFUE RIVERをもつこの町は，Swampの中にある。そして，どこまでも続く広大無限な大地，豊かなる水源は，まさしく放牧に適している。また，ここは漁業地区でもある。人々が自由かつ平和に生活しているのは，こうした素晴らしい環境条件にある故で，私が人々に，そしてこの町に静かな活気を覚えたのは，それ故かも知れない。しかし，年間を通じて蚊，他のinsectが多い町，そして暑い町，いわゆるTownといわれるCHOMA，MONZEに至るまでに時として数日を費やさなければならないTransport Problems，さらにそれより生ずる物資不足はザンビア人にしても決して不自由のない町ではない。むしろ，この町に赴任した人々は，その時点で他の町へのTransferを考えているという。ここは俗にいうブッシュにある町である。そして私がこの町に住みつくことが出来たのは，常に求むる心，そして受け入れる心，さらには耐える心をもち続けたためであり，この町が，この町の人々が私に合っていたためでもあろう。

NAMWALAの人々はTonga族，Ira族よりなり，いずれの部族も牛を飼う習慣をもつ。Ira族は非常に用心深い気質をもっているためか，あるいは昔部族間に大きな異変があったためか，他の部族を信じようとはせず，時として同部族間でも他人を信じないという風俗習慣をもっ

ている。Ira族はNAMWALAだけに存在する危険な部族であるが，Southern Province全体に広がってみられるTonga族は，陽気で典型的アフリカ部族である。

すでに記述したようにNAMWALAでは2名のCommercial Farmerと多くのTraditional Farmerによって，ほぼ15万頭の牛が飼われている。しかしながら15万頭という数値は確認されたものであって，おそらくは20万頭を越える頭数が飼われているものと思われる。この地に飼われている牛種はTonga Cattle（Traditional Cattle）であり，他のProvinceにくらべ群を抜いた体格をもっている。

牛の放牧地は，雨季にはNAMWALAの地区でも比較的高い地，いわゆるWood Landといわれるブッシュが選ばれるが，乾季にはSwampおよびKAFUE RIVERに沿ったKAFUE FLATがそれに変わるという半遊牧的飼育形態をもっている。牛は極めて野生化しており，捕獲に相当な労力，人数と時間を要するのが通常である。一般に牛は畜主にとって何よりも大切な財産であり，人間の死亡は天命によるものとされるが，牛のそれは畜主の至らなさのために起ったものと考えられる。そうした牛の治療，予防等にあたる獣医師は何よりも頼られる。ここでは私は名士である。

2. 任務内容

私は，NAMWALAにDistrict Veterinary Officer（D.V.O.）として派遣されたのである。すでに記述したように，一般にD.V.O.というのはNAMWALA Veterinary OfficeにおいてHeadの立場にあり，それはすべてを任されたAdministratorである。即ち，①Official LetterのCheckとReply，②Staff Troubleの解決，③年度予算（Capital Project）および薬品購入リストの作成，④Staffの給料支給，⑤MonthlyおよびAnnual Reportの作成，⑥NAMWALAにおける会議参加などに携ることで，またそれらすべてに関して責任があるのである。さらに，15万頭の牛をかかえた責任者でもある。しかしながら，Volunteerは，こうしたAdministrationにタッチすべきものではないが，Headである以上，たとえそれにタッチせずとも，責任をもたなければならない立場にあり，Administrationの役目を果たしてこそ，Staffをはじめとしてすべての統制が成り立ち，

その上でVolunteerとしての仕事がなされるべきである。私はD.V.O.であると同時にVolunteerであることを忘れず，Admnistrationにタッチしながらも，自らの仕事を行なってきたといえよう。しかし，あらゆるAdmnistrationにタッチ，サジェストするものの，通常はこれらをLivestock Officerに任せ，事務的業務より，Field業務に獣医師またはVolunteerとして，牛，鶏，豚，まれに犬の治療，予防および伝染病発生時の緊急対策，指導などに力を入れるとともに，畜主，Staffの指導に従事する立場を自ら形成し，Livestock Officerの不在のかぎり，すべてを行なったといえる。

Ⅱ 協力活動（仕事）とその成果

私が行なった仕事は，形として残らないもの，しかし，それは人々の心の中に残るもの，そして形として多く残っているものといろいろ考えられよう。ここでは，形として残ったものについて記述したい。

1. 往診のSystem形成と技術指導

不規則的なSick Report および往診の手順は常に不経済なPetrolの使用と，牛の死亡を招いていたのが私の赴任した当時の状況であった。もちろん，これは，緊急時には免れないが，私は自己の仕事を合理的にするためにも，改善を行なったといえよう。朝の8時までにSick Reporter（畜主および地方17ヶ所に分散しているVeterinary CampからのVeterinary Assistantによる）は，事務所に待機すること。私は書類（Official Letter）に目を通しながら，Reporterより，病畜の症状をLivestock Officerまたは事務所に勤務するSenior Veterinary Assistant，Veterinary Assistantの通訳をとおして聞きいれ，症状のおもい患畜から往診の順序を決定し，9時前後にはLivestock Officerおよびその他のStaffを伴って往診にでかける。そしてFieldにて診断および治療方法をStaffに教授し，時には畜主の飼育方法に欠陥があればその指導を行なう。午後には書類の整理，Postmortemがあったなら，そのReportとともにMAZABUKA Research StationへSpecimenを送り，その書類の手続きを行なう。それらの合い間に，しばしばOffice内でmeetingを開いたり，私は私なりに屠畜検査などの業務を行なう。そして午前，午後を問わず，もちろんReportの受け入れを行ない，牛の伝染病と思われる疾病で死亡したと考

えられ，また数頭の死亡がみられた場合には，翌朝6時に往診に行くというSystemをもうけた。さらに，月はじめには17ヶ所のVeterinary Campを訪れ，地方の状況，疾患で目立ったものがないかどうか，また，Staffに問題はないかどうかなどを知るとともに，給料の支給，薬品の支給を行なう。こうしたStaffおよび畜主との接触をもちながら，技術指導，Staffの問題解決，さらに私自身の地方および現地人に対する知見の拡張を行なっていたといえよう。

2. 主なる疾病について

a) Haemorrhagic Septicaemia（出血性敗血症）

私が赴任して最初に遭遇したのが，この疾病である。もちろん，日本ではみられない急性伝染性疾患である。この疾病により，約7,000頭の牛がこのNAMWALAで死亡したといわれる。私が，この疾病について行なったことは，①地方17ヶ所のVeterinary Compで業務をあずかるSenior Veterinary Assistant，Veterinry Assistantなどに対し，疾病の認識，早期発見，血液サンプルの採集と同時に，D.V.O.に緊急連絡をすること，②疾病のMicroscopeによる診断方法教授，③発生場所を地図に示し，数少ないVaccine故に，リングVaccinationの決定とそのスケジュール作成，④死亡牛の解剖（Postmortem）方法と材料（組織）採集方法の教授，などである。

b) Tripanosomiasis（トリパノゾーマ）

年間を通じてみられる慢性または急性伝染病で，Tse Tse Flyの媒体による。KAFUE NATIONAL PARK近くに放牧されている牛のほとんどが，この疾病にやられ，多くは慢性経過をとるが，昨年，その発生区LUBWEにおいて約70頭の牛が死亡した。私が，この疾病に対し行なったことは，①治療および予防薬の定期的接種，治療の義務づけ，②往診時Microscope，治療薬を携行することによって，即時診断と治療開始，③病体牛のみならず，健康牛と思われる牛に対しても，診断のための血液採集励行義務づけ。

c) Rabies（狂犬病）

ザンビア全体にみられる，人間にとって最も危険かつ深刻な疾病である。NAMWALAにおいて，疾病は，犬，牛ともに数多くみられ，厳しく仕事を進めていたにもかかわらず，一人の狂犬病による死亡者を出したこ

とは，私にとって，とても残念でならない。この疾病の最も重要な事柄は，人々と私，私のStaff，我々と病院というCommunicationが必要であるだけでなく，機敏な連絡と決断が，人々にも，我々にも，そして病院側にも必要である。そして，Police People は，我々をサポートしなければならない。私が，こうした認識を人々にうえつけたにもかかわらず，死亡した本人，現地における人々の認識不足，さらには病院側の無知で生じた不幸な人災ともいえる出来事であった。(注)患者は発見後（症状がみられた時点で）病院に入院し，私のサジェストにより隔離がなされたが，再度現地へ帰され，その日に死亡（９月中旬未明）。

私は，この疾病に対し最も力を入れてControlにあたったといえる。主に①３回にわたるRabies Campaign を行ない，野良犬の撲滅，犬の登録とVaccine接種の義務づけ，人々に対し狂犬病に関する認識のうえつけ，②病院との接触をもつことにより，人々が狂犬病犬，牛に咬まれた場合，あるいは接触した場合の対策を検討，③狂犬病と思われる犬の隔離と症状観察をStaff に義務づけ，死亡後の組織（診断のためのSpecimen）採集方法，などであるが，この国で，狂犬病の撲滅はあらゆる条件を含めて不可能であるため，私は，それが人々におよぶことを最少限にくい止めるべく，発生後の病院，Police，Staff，私とのCommunicationの確立と，人々に狂犬病とはどんなものか，咬まれた場合にどうしなければならないか，などの教授を努めて行なったのである。畜獣における狂犬病は防ぐことができなくとも，人々に狂犬病を深く理解してもらい，たとえ狂犬病犬に咬まれても早期診断（決断）と治療がなされれば，不幸な死を招くことがないということを私の根本的な信念として仕事に精出してきたのである。ここで，自ら，１４本（１４日間）のAnti-Rabies Injectionを行ないながらも，この仕事にあたったことは，生涯忘れることのない出来事として，私の記憶の中に残るだろう。

d) Tuberculosis（結核）

Tuberculosis（T.B.）は，慢性伝染性疾患であり，人々への感染に牛畜が関与していることから，Control されるべき疾病である。私はMeat Inspection により，高い罹患率を見いだし，それをデータとしてまとめ，提出したことがある。私は，これについてかなりの試みを行なったが，ある程度失敗に終わったといわざるを得ない。私は主に

①T. B. のMeat Inspectionにより調査しまとめた，②さらに，T. B.に対する詳しいデータを得るためと，そのControl方法を確立するために，Head QuarterにT. B. Testingの試みを要請した（成立しなかったが），③人々に生乳を飲まぬように注意，教授した，などを行なった。この疾病は慢性で，しかも目立たないだけに，あまり深刻に考えられていないが，経済的損失，人々への感染の可能性，さらに感染した場合に長期治療が必要などから，深刻かつ真剣に考え，対策を練るべきであろう。これは大きなProjectとなり得，また多額な金が必要であることから，すでにVolunteerの域を脱しているかも知れないが，私はそのための試みをすることによって，そのProjectの下準備を行なったともいえよう。そして，Head Quarterも疾病の深刻性を認識し，私の提出した計画が必要であることを認めたに違いあるまい。

e）その他の疾病

肝蛭症については，その治療試験，発生率の調査，Staffに虫体卵の教授などを，Heartwaterには脳スメアーによる検出方法をStaffに，そしてまた早期発見による早期治療が可能であることを畜主およびStaffに教え，励行し，Senkobo Disease，Foot and Mouth Diseaseについても，Volunteerとして，またD. V. O.として，いろいろと教授，指導，治療などに努めてきた。

3. Capital Project

私がNAMWALAに赴任した時に，D. V. O.のための大きな家がほぼ完成していた。部屋数八つ，そして，それぞれ二つずつのトイレと風呂付きの，NAMWALAで最も大きく新しい家なのである。まず，私はDistrict Governer，District Secretaryとともに，この大きな家について検討したのが私のCapital Projectのはじまりである。即ち，この家はVeterinary SectionによってD. V. O. NAMWALAのものとして計22,000KWの支出によって建築されたのであるが，私がその家の代わりとしてNew Veterinoay OfficeとClinic Room，New Veterinary Staff Houseの建設を交渉したのである。以下，私が行なった主なProjectについて記述すると，①New Office，Clinic Room，LUBANDA Staff House，CHITONGO New Officeの建設，②NAMWALA Veterinary Officeへの電気導入，③四つのDip Tank建設，④二つのCrush Pen建設予定（1980年予定），⑤Hide

and Skin Project進行中，⑥Artificial Insemination Project（今年の１１月からの予定）などがあげられる。

4. Veterinary Equipments

我々が，日本にて，派遣前訓練中に，すでに協力隊員第１号として赴任（派遣）されていたDr. KASHINO氏のProjectを知り，我々はその仕事を引き継いだといえる。1,０００万円機材の選択は同期であるDr. SEKI氏が主体となって日本での訓練中に行なわれた。残念ながら，この機材がザンビアに着いたのは，今年（１９７９年）の３月であったが，我々はその機材の点検，配置場所の選定，配置などを行なった。これらの機材が有効に使用されるには，まだまだ難点があるが，これらについては，後の隊員に引き継ぎたいものだ。なぜなら，我々は最善をつくしたが，これらの難点を解決すべく時間がないからである。

5. Transport：TOYOTA LAND CRUISER

１９７７年１２月に1,０００万円機材の配置および定期点検，NAMWALAにおけるTransport Problemなどの必要性，問題解決から，私の署名によって要請されたのがTOYOTA LAND CRUISERである。我々と調整員稲垣氏によって引き取ることができたのは翌年１２月である。このTransportは我々獣医協力活動を主として，1,０００万円機材の配置，Veterinary SectionでのTransport欠除の補充，さらにはＪＯＣＶ OfficeへのTransportと後めて有効に利用されている。Transportは我々獣医師が広範囲な活動を必要とする以上，欠くべからざる足であった。そして私はLAND CRUISERの使用によって，District Veterinary Officerとしての十分な仕事をなし得たといえる。

私の帰国にあたり，このLAND CRUISERがさらに重要かつ必要性を増し，有効，かつまた長期利用がなされるよう，残る獣医隊員にお願いしたいものである。

Ⅲ NAMWALAでの私

NAMWALAという小さな町に２年近く生活して，生活するためのいろいろな知識を獲得し，またあらゆる障害に我が全身を投じた私は，これを私が演じた青春として，青春の心として，いつまでも忘れずにいたいものである。

1. 私生活

NAMWALAは幹線道路から１５３Kmまたは１７５Kmほど奥に入った町

である。ここはKAFUE NATIONAL PARK, KAFUE RIVERを目の前にした素晴らしい町であるが，雨季には泥，沼地に，乾季には砂地に悩まされつづけ，いわゆる我々がtownとよぶCHOMA，MONZEにいくにあたり，しばしば容易ならぬ苦労を強いられたことのある孤立した町なのだ。この町の人々と私に課せられたTransport Problemは，未だに解決されることのない大きな課題である。この町の発展はTransport Problemが解決されれば，なんの障害もなくなろう。道路をアスファルトにし，KAFUE RIVERに橋を，そして町への鉄道を，というProjectは，この町が有望なだけに，さほど遠くない政府の計画のように思える。

砂地と痩せた土地での野菜づくりは，たびたびの失敗の上に，この4月（1979年）にはじめて成功したといえる。人工肥料，牛糞および灰を撒き，殺虫剤の噴霧，さらには水撒きなどの畑づくり，および野菜への心づくしの結果の成功であったのであろう。自ら生産した日本野菜を口にした喜びは大なるものである。しかし，野菜づくりも乾季に限り可能であって，雨季には現地の人々に食べることのできる野生の草を教えてもらうことによって，それらを現地人と同様，野菜不足を補うために食べていたのである。

しかし，そうした反面，いかなる種の肉にも不自由しないのがNAMWALAである。日本では高価のためにほとんど口にすることがなかった牛肉は，1kg400～500円という安価で入手できるので，日常のおかずである。私の職業柄なのかも知れないが，100kgの豚は15,000円程度で，これもバカ安であろう。さらにKAFUE NATIONAL PARKがあるため，NAMWALAならではのBush Meat（野生動物の肉）を口にすることが多い。癖，臭いのない，そして軟らかなこの野生肉は，このNAMWALAに来て以来，私の何よりもの大好物となっている。カバ，バッファロー，クドゥー，アンテロープ，イボイノシシ，シマウマなどは，心ゆくまでenjoyすることのできた肉である。

銀行，ガソリンスタンドおよび店と呼べるほどの店のないこの町での生活は決して容易ではなかったが，未だに残る古い風俗，習慣を知り得たことはこの町故で，それなりに良かった面が多い。

2. 風俗，習慣

NAMWALAのTongaおよびIra族による風俗，習慣は他の部族と同

様のもの，NAMWALAのTonga，Ira族だけにみられるものとがあるが，いずれの場合でも遠い昔から今日にいたるまで変わることなくみられるようである。この風俗，習慣が，他の部族，文明の感化に影響されずにあってほしい。

a）結　婚

結婚に関して，多くの規制があるのは女性側である。一般にNAMWALAのTonga族では結婚に際して男性は牛１２頭と５万円の金を用意しなければならない。Ira族では牛２５頭と心ばかりの金が必要とされる。いずれの場合でも，これらの牛，金は，結婚相手となる女性の両親，親戚に渡されるのである。さらに，いかなる理由があろうと，いかに愛するカップルであろうと，両親の許可がなければ結婚は成立しないのである。かなりの自由に対する拘束であるが，ここにおいては結婚は厳格であり，こうした厳しさがあってこそ，ここでの人々の間に均衡が保たれ，また Stranger の入り込むことのできない一策として維持されているのではないだろうか。

b）NKOLOLO Ceremeoy

女性が初潮を迎えた際に行なわれる儀式である。娘が初潮を迎えたことによって女になったことを意味し，娘に対し，近所の老女達が１ヶ月にわたり，あらゆる事柄を教授するのである。この場合，その娘は１ヶ月の間，外出はむろん，他の人々との一切の出合いも許されないのである。すべてが教授されたという時になって，それから数日間，親戚，近所および関係者を呼んで，いわゆるパーティがなされるのである。私も数度招かれたが，それは牛肉，野生肉，ビール（チブク）の料理，飲物が用意された素晴らしいパーティである。踊って飲んで，夜明かしまでするパーティである。私が招かれたFarmでは，５頭の牛，２頭のバッファローが，このために用意されていた。さすが牛のNAMWALAである。

c）Funeral（葬式）

葬式の規模は，その死亡した人物の社会的地位によって異なる。

Chief（村長のような地位）が死亡した場合は１ヶ月にわたり儀式が催され，地位の偉大さによって異なるが，時には３０頭以上もの牛が殺されるのである。これらの牛は食用にされることもなく，ただ死亡した者に対する慰めによるものではないかと考えられる。獣医師である私

は，これに対し，かなり無益なる牛の屠殺と感じたので，現地の人々に，そのようなことのないよう理解を求めたが，やはり風俗，習慣の壁は底知れぬ厚さを感ずるのみであった。

さて，葬式において女性は，上半身裸で踊むのである。だから，数人の女性が裸で歩いていれば，その近所に葬式があることがおのずと知れる。

d) その他

その他の主な儀式，習慣は，野生動物，牛などにちなんだものが多い。ヤリを手にしてライオン，レオパードなどの野獣から守る儀式は，NAMWALAそのものを示しているといえよう。

Ⅳ 将来の展望

牛の飼育に必要とされるのは，豊かな草と水である。NAMWALAは，この条件を十分に満たす地区であって，それ故に15万頭の牛が飼われているといえよう。しかしその反面KAFUE NATIONAL PARKに接しているNAMWALAにおいて，数多くの牛の疾病が発生していることが，そうした条件を満たしながらも大きな障害となっている。

1. 疾 病

NAMWALAはTuberculosis, Foot and Mouth Diseaseの特別検疫地区（Under Quarantine）である。中でもTuberculosisは深刻ともいうべき疾病であるが，一般に慢性化し，疾病は表面化しにくいので，安易に思われている。

a) Tuberculosis

屠畜検査によって，おどろくべき罹患率をみるのがTuberculosisであり，この疾病に対する調査，対策はまったくなされていない。

一般に，この疾病はKAFUE NATIONAL PARKのWild Animalと関連性があるといわれているが，その調査が必要であろう。

(注)シカ類のリッジウェイにみられるT. B. の罹患率は90%といわれている。Wild Animal との接触の強いNAMWALAの牛が，50%以上のT. B. 罹患率をもっているのは偶然の一致とは思えない。あらゆるT. B. の調査を行ない，その上で私が以前のPlan で述べたようなProject が必要と思わる。

b) Rabies

狂犬病は全国でみられるが，MAMWALAにおける狂犬病は，やはりKAFUE NATIONAL PARKのWild Animal(とくにジャッカル)との関係が非常に深いといえる。狂犬病の発生が，KAFUE NATIONAL PARKに沿ってみられるのは，それを物語っていよう。ここで我々がすべきことは，狂犬病予防接種の励行である。あらゆる条件から，狂犬病の発生を防ぐことはむずかしいが，予防接種によってある程度の予防が可能である。少なくとも，人間への影響は防げよう。

c) Trypanonomiasis

極めてKAFUE NATIONAL PARKとの関連性をもつ。KAFUE NATIONAL PARKに沿って定期的予防薬の投与がなされれば，大きな発生はみられまい。このザンビアは八つの国々に囲まれているため，熱帯病防止が困難で，また，多くのNATIONAL PARKの存在から疾病防止にはかなり難しい点が多い。しかし，国境およびNATIONAL PARKに沿って，各種Vaccine接種，さらに，Dip Tank設立による定期的薬浴によって疾病発生は最小の範囲にとどまるのではないだろうか。これが，我々のこれからの使命，根本的な業務となるべきである。

2. Dairy Cowの育成

3人に1人が牛を所有しているという牛の数があるにもかかわらず，チーズ，バターなどの乳製品を輸入に頼っているのは，乳の生産，ひいてはDairy Cowの育成がほとんどみられないからである。これは，ザンビア獣医局の大きな課題であるが，根本的には畜主の側に困難性を認めざるを得ない。しかし1地区，つまり，あるDistrictにこのProjectがあってもよさそうなものである。私がNAMWALAに滞在中，2度にわたる大統領の訪問を受けた。その訪問時に彼が演説した内容は，この町でDairy Cowを育成し，乳製品の生産を，という意味を含んだものであった。私は，この町でのDairy Cowの育成はかなり困難と思うが，畜主への指導からはじまり，乳製品工場の建設がなされれば，容易ならずとも可能性は十分にあると考える。政府の模範的Farmの設立，畜主への乳製品に対する認識をDairy Cow育成指導，さらには共同搾乳場と専門搾乳者，乳製品工場の設立が達成されれば，NAMWALAが大きく発展するべき基盤をもつことになろう。こうしたProjectがNAMWALAに限らず，

いずれかのDistrictでもなされるべきである。

以上のように，NAMWALA，ひいてはザンビアの獣医及び畜産事情は，未知の可能性，発展すべき素質をもち，将来の展望も非常に恵まれている。ここで，必要なる事柄として，ザンビア政府のより多くのAnimal Husband とVeterinary Officerの要請が望まれる。そして，そうした人々は，コントラクターではなく，援助による専門家，Volunteerによる構成であるべきである。私が接した，いかなるコントラクターも，仕事よりも金に興味があるからである。これに対し専門家およびVolunteerは，自らのProject，仕事により強い情熱をもやすことができる，という観点からの意見である。

V 結び

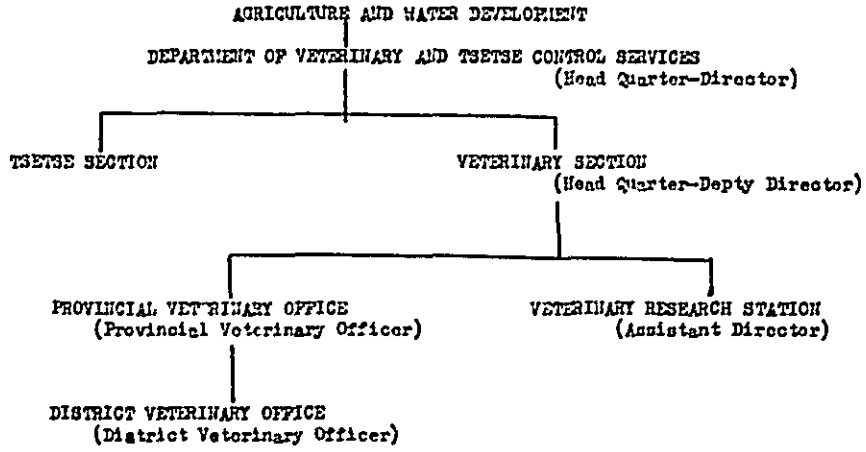
奥地前進主義によって私がNAMWALAに赴任したわけではないが，奥地には，生活するうえでの苦しさがある代わりに，喜びがあり，そして人々とのCommunicationの緻密さがあり，さらにはVolunteerらしい生活があることを自ら知り得た。ここで私は，与えることのできるすべてのものを与え，私が得ることのできるすべてのものを得るという，この上なき貴重な体験をしたといえよう。私にとって，人間が人間性を発揮できるのは文明社会ではなく，こうした自然の中で，その人々との間でのことであった。

ここで日本人が2年間の生活を営んでいた……，彼は Volunteer であり，またVeterinary Officer であった……，彼はいろいろな物を残し，人々の中に浸透していった。彼は我々の忘れ得ぬ人として，助け合う心をもった人として，一生我々の心の中に残るだろう……などと，私の帰国にあたり，Staff，畜主をはじめ，多くの人々が口にしていることは，この上ない幸せかも知れない。

私がVolunteerとして，この国に派遣されて，今でも，自己の選んだ道は間違ったものではなかったと痛感している。そして，今後，私が再びザンビアに派遣される機会があれば，自ら進んで，そうしたいと願うのみである。ここで私は素晴らしい仕事およびProjectをものにし，今まで以上の成果をあげ，ザンビアの発展に貢献できるという自信が充分にあるからである。

最後に私のVolunteer Activityと私生活に対して，いろいろと援助して下さった人々に深く感謝して，総合報告書の結びとする。そして私は日本にあっても，ザンビアの発展，特に獣医及び畜産の向上を心から願っているものである。

ザンビアにおける獣医局構造 (Table I)



ザンビアにおける牛の分布状況 (Table II)

PROVINCE	HEAD QUARTER	NUMBER OF CATTLE	PERCENTAGE *
SOUTHERN	CHOMA	694,619	42.2
WESTERN	MONGU	379,938	23,0
CENTRAL	KABWE	197,498	12.0
EASTERN	CHIPATA	188,396	11.5
NORTHERN	MBALA	83,461	5.1
NORTH WESTERN	ZAMBEZI	36,072	2.2
LUSAKA	LUSAKA	32,184	2.0
COOPERBELT	NDOLA	25,471	1.5
LUAPULA	LUAPULA	7,143	0.5

※ percentageは、全体(1650万頭)と比較した%(%)

総合報告書へのコメント

千 葉 好 夫

事実関係の訂正，補稿を含む現時点での所感（原稿の内容）はありませんので，報告書をそのまま掲載されてもさしつかえありません。

病 理 解・剖

病 理 解 剖

千葉隊員の報告書を読んで

松山　茂

すばらしい報告書であると思う。本人もさることながら送り出した側をも十分に満足させる協力活動記録であろう。

本人の能力，意欲が大きくものをいってることは間違いのないところであるが，千葉隊員の場合，①単なるボランティアとしてだけではなく，与えられた地位がDistrict Veterinary Officerという要職であったこと，②着任早々与えられた広大な家の代りに新しいオフィスを要求するという行動力を有する隊員であったこと（そしてそれが受け入れられたらしいこと），③さらにこの行動力を実質的に地理的に拡大せしめ得た機動力（トヨタランドクルーザー）の配備を得たこと等の幸運が，たった2カ年（敢えてたった2カ年と言わせていただきたい）の期間に，かくもみのりある成果をあげ得た理由でもあろう。

ザンビアの奥地で，しかもかなり不自由な生活を強いられたに違いないにもかかわらず，本報告書の中にそれらに対する不満，苦情の類の表現を見出すことは難しい。それどころか辺境の地でたくましく生活していく千葉隊員の姿が報告書の随所に，いや行間からも読み取れるのである。幾度か失敗したにもかかわらず，「自ら生産した日本野菜を口にした喜びは大なるものがある」には私も感激した。

彼の協力隊員（獣医師）としての活動内容，取り組み姿勢には一点の非の打ち所もない。よくやったとしかいいようがない。しかし前にも述べたように，たった2カ年という短期間で，この報告書の内容にある数々のことがどこまで彼の地に定着したか，かすかな疑問を抱く私は苦労性なのであろうか。診断，治療その他の技術の教授，あるいは各種作業の義務づけ等を行ったとしているが，これらに対する彼等の反応及びそのアフターケアーについての記載がないのが気になる。

千葉隊員がかくも努力して播いた種である。せっかく植えた苗である。しかし彼等が枯れたり，しおれたりすることなく，しっかりと大地に根をはり大樹

となるには環境が必ずしも好適とは言えないであろう。願わくは，協力隊が間断なく後任者を派遣して，播いた種がみごとな果実を得るよう，可能な限りの努力をしていただきたいと思う。

ところで，報告書の中で，彼の地の「風俗，習慣が，他の部族，文明の感化に影響されずにあってほしい」とありながら，葬式の儀式で多くの牛が殺されるのを見て「……無益なる牛の屠殺と感じたので，現地の人々に，そのようなことのないよう理解を求めた」とある。ほほえましい矛盾を感じた次第である。また結びに「私にとって人間が人間性を発揮できるのは文明社会ではなく，こうした自然の中で，その人々との間でのことであった」とあるが，これだけは同意いたしかねる。千葉隊員の報告書から判断する限り，同隊員のようなファイトある人間は，非文明社会(?)のみならず，文明社会にあっても十分に人間性が発揮できることを保証したい。

2カ年の貴重な経験は生涯反芻するに値するものと思う。最後に「ご苦労様でした」と申し上げるとともに，すばらしい2カ年の体験に対し，心から「よかったね，おめでとう！」と申し上げたい。（青年海外協力隊技術専門委員＝獣医師）

あとがき

青年海外協力隊員の報告書集を発刊するに際し，数多い報告書を，どう分類し，いかに活用するか，いろいろ意見がありましたが，隊員の活動を広く紹介する観点から，今回は国別編とし，昭和54年度，55年度の2カ年で全派遣国編を完了させる予定とし，その後，順次，違った角度で報告書集の作成を継続する方針で臨みました。

国ごとに収録した報告書の数も，諸般の都合で数篇に限定せざるを得ませんでしたし，職種の配分などについても，それぞれの国における協力隊の特徴をカバーしているかなど，不充分な点もあろうかと思いますが，とりあえず発刊に踏み切りました。

ご活用下さる皆様がたのご意見，ご提言をいただきつつ，今後一層の充実をはかりたいと思います。

末筆ながら，この報告書集のために，ご多忙中にもかかわらず，積極的にご協力いただき，報告書に対するコメントをご執筆下さった技術専門委員の方がた，ならびに報告書の収録を快諾され，「追記」の原稿を寄せられた帰国隊員の皆様に厚くお礼申し上げます。

昭和55年 3月

啓発課長　高　橋　成　雄

海外協力の現場から――青年海外協力隊員の記録<ザンビア編>

昭和55年3月発行
編　者　国際協力事業団青年海外協力隊事務局
発行所　国際協力事業団青年海外協力隊事務局
〒150　東京都渋谷区広尾4－2－24
電　話　(03) 400－7261(代)
印刷所　株式会社　東　神　堂

〔非売品〕

LIB